
アンノウン・プリンセス

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・プリンセス

【Nコード】

N8355A

【作者名】

雨月

【あらすじ】

前作最後、友達にダンボールに包まれ魔界に送られた罪人天使の
アンノウン・エンジェル
天道時時雨は魔界地下支部の大会にプリンセス候補と一緒に
てんどうじしぐれ
出ることになったが……。

そのいち！！ プロローグだったらいいなこの出会い（前書き）

美奈さん（間違えました！皆さんですね！）のお陰で時雨君はまだまだいけそうです！これからは前作よりあまり書けないかも知れませんが頑張ります！

そのいち！！ プロローグだったらいいなこの出会い

僕、天道時てんとつじ 時雨しぐれは助けを求めています。

ここは魔界、なぜ人間界にいた奴がこんなヤバ気な雰囲気の場所に
いるかといいますと、僕がとてつもなく悪いんです。僕の記憶が
正しいなら僕の友達に雑巾を顔面にぶつけてしまいました。多分彼
はそれを怒り、僕を魔の宅急便で魔界に送りこんだのでしょう。
なんとなく違う気がしますですがこれであっていると思う今日この頃
です。

「・・・みんなどうしているかなあ？」

辺りに僕以外に誰もいないので自然と独り言を言ってしまう。
寂しいんです……。そして故郷のみんなを頭に……。思い浮
かべる事が出来ません！

「・・・あれっ？」

どうしてでしょうか？ばやけてしか頭に思い出すことが出来ない
のです。（頭を強く打ったのだろうか？）とりあえず、『プリンセ
ス』候補を只今捜しています！知ってる方は至急、ご連絡ください。
ヨレヨレの学生服を着た人が魔界でまっていますから。

流石に歩き疲れたので休憩をとりたいと思います。

「・・・・・・・・ふう。」

「お疲れですねえ、そこのお兄さん。」

「・・・まあ、人？を捜しているんです。それがなかなか見つからなくて・・・」

「どういふ人ですか？良ければ私が捜しましょうか？」

「いえいえ、気持ちだけで結構ですよ。」

「じゃあ、せめてその人の体型なんか教えてください。もし見つかったら連絡しますよ？」

僕は先程まで入っていたダンボールの中に書かれていた事を思い出すことにした。

『・・・君が探すプリンスは次のような人物である。君が好きそうな奴だから安心してくれ！まず、ペッタンコだ！そんで身長は君より小さい。以上！』

「・・・えーつとですね。ペッタンコで身長は小さいそうです。」

「そうですか、わかりました！・・・すみませんが私も人を捜してるんです。出来ればその人と会った場合、捜していますと伝えてほしいのですが？」

「あ、はい！大丈夫ですよ？」

「従兄弟から聞いたのですが、その人は青いヨレヨレの学生服を着ているそうです。」

「あ、はい！わかりました！そんな格好してるなら直ぐ見つかりますよ！」

奇遇な事もあるものだなあ。僕も青いヨレヨレの学生服を着ている。

「ありがとうございます。貴方も見つかるといいですね！」

悪いと思ったけれど男の性かな？ついつい目が相手をチェックしてしまう。

・・・ペタンコだ。おまけに身長は低い多分、小学生ぐらいかな？失礼だが年を聞いてみることにしました。

「・・・失礼ですがおいくつですか？」

「・・・えーと、十七です。」

僕より二歳年上だ。

「私、魔界のプリンス候補なんですよ！今探してる人と一緒に大会に出るんです！」

うわあ！この人かなり嬉しそうだなあ。

「従兄弟に聞いているけどかなり優しいそうですよ！」

「へえ、会ってみたいですねえ！」

どんな人だろう。

「そしてかなりぬけてる所があるとか・・・。」

「その人は多分大変でしょうね？」

あれ？この人なんか笑ってるような気がする。

「・・・気が付かないんですか？」

うーん、もしかして世界の窓が開いてるかな？・・・いや、違うなあ？

「考えている顔も素敵ですよ？天道時 時雨君？私が貴方の相棒ですよ！名前は霜崎^{しもなき} 瀬里奈^{せりな}といます。ちなみに亜美の姉です。噂は聞いてますよ？小さい子は背中に乗ってもいいんですよ？じゃ、遠慮なく！」

世界は・・・狭いものだなあ。

それに 始まる大会は恐怖である。(前書き)

うーん、なんかいろいろ人がでてきます。

それに 始まる大会は恐怖である。

霜崎 瀬里奈 十七歳
インセント・エンジェル

断罪天使身長 小さい そしてペツタンコこれが僕の相棒の人の
大体の見た目である。性格はいたずら好きで人をからかうのが三度
の飯より好きらしい。普段はいたって甘えん坊將軍である。

僕と瀬里奈さんはとりあえず歩いている。

「……………すう。」

実際、歩いているのは僕であり瀬里奈さんは僕の背中で寝てしま
っている。

出会ってから少し経つ。ずっと歩いていたからか、街が見えてき
た。

「……………うん、もうちょっとかな？」

瀬里奈さんは普段魔界におらず、天界で暮らしているそうだ。彼
女はそれ以外の事をあまり多く喋ろうとしなかった。理由を聞こう
とすると

『大人の女に秘密を聞いてはいけないわ、時雨君。』

と言われてしまいその後、僕は尋ねていない。（見た目まだ幼
いだけだなあ。……………実際、彼女は十七歳であるから未成年じ
やないのかな？）

僕がそんな事を考えていると街の前についた。街には門が建って
おり、更に警備兵が二人立っている。

「・・・何かこの街に用があるんですか？」

右に立っている方が僕に尋ねてくる。

「この街で魔王を決める大会が行われるんですか？」
僕は正直に尋ねた。

「そうだ。」

瀬里奈さんが起きたようだ。背中では動いている。・・・かなしいかな？柔らかな感覚があまりしない。（一応あるみたいだ。）
「僕たちその大会に出るんです。入っていいですか？」

うーん、かなり睨まれてるような気がする。

「いいだろう。通行を許可しよう。」

礼を述べ、黙って門の中に行く僕たちを門番さんが引き止める。

「・・・少年、後ろにおんぶしている少女は妹か？」
違います。と答える前に瀬里奈さんが門番に答える。

「私はこの人の大事な彼女よ！」

僕と門番が絶句。そして今まで黙っていた片方の門番が喋った。
「・・・あまり幼い子は犯罪になるぞ。」

「・・・大丈夫です。この人は・・・」

さて、何て言おうかな？

「それより僕はこの子の保護者です。」

これでごまかせたかな？

「・・・少年、嘘をついてますと顔に書かれているぞ。まあ、大会頑張つて来てくれ。」

・・・僕は嘘は無理かな？

街に入ると大会のポスターが色んな所に貼つてあった。大会が行わる予定の場所は街の中心にある大きな建物。

「時雨君！デートしよっ！デート！」

僕が瀬里奈さんを背負っていたら犯罪者と間違えられると思いますが、そこはどうでしょう。

「・・・また今度にしましょう。今はあの大きな建物に行きましょう。もうそろそろ始まる時間ですよ。」

ポスターに書かれていた時間まで後少し。

「ぶっ！わかったよっ！時雨君、早く行つて終わらせようよ。」

大会本部一階。僕たちはそこで受付に向かうところである。

「大会に出る者はどうしたらいいんですか？」

受付のお姉さんに尋ねる。

「あ、大会に出る方ならあちらの階段の上になっております。」

「ありがとうございます。」

僕は二段飛ばしで階段を駆け上がる。もうそんなに時間がないみたいだ。

「時雨君、多分そんなに慌てなくてもいいよ。」

「・・・念のためだよ。」

階段を駆け上がるとそこは・・・学校みたいな作りになっており、簡単に説明すると廊下であった。辺りを見渡すと誰もいない。何故だろう？

突然、スピーカーがなり始める。

『校内放送、これより開会式を始めます。一、始めの言葉を魔界地上の現魔王をしておりますハデスさんです。』

『はい、皆様こんにちわ！ハデスと申します！今回の大会には特別ゲストがいます！私のお兄ちゃんですっ！お兄ちゃんは・・・』

『はい、ありがとうございます！おのろけ話は結構ですので次に進みたいと思います。二、ルール説明。ハデスさん、お願いします。』

僕たちは放送を廊下の隅で聞いていた。

「・・・ハデス・・・？」

「知り合いなの？時雨君。」

「うーん、知ってるけど顔がわからないなあ。」

『ルールは簡単です。トーナメント方式で闘ってもらいます。ステージは地下にありますので試合のあるかたは地下にきてくださいね？ちなみに言いますと今回、身長制限の規制が緩やかになりました。身長が低い人は補助の人がついてます。大会参加者の中に一人だけいます！そして！その補助している人が私のだーい好きで優しいお兄……』

『……はい、ルール説明ありがとうございました。今回、身長制限が緩んだので楽しくなりそうですね！今日は試合はありませんので各自、帰って結構ですよ。』

身長制限？ジェットコースターにでも乗るんだろうか？

「つまり、僕だけしかないのか……」

その時、廊下の向こうから誰かが走ってきた。

「おにーちゃんー！」

「時雨君、誰かが走ってくるよ！迎撃する？」

「危ないからしないでいいよ！……それに何処かで聞いた感じの声のような気がする。」

走って来たのは女の子であった。

「おにーちゃん！久しぶり！ハデスだよっ！」

ハデス？さっきのひとだ。

「忘れたかな？おにーちゃんによくオレンジジュースを買ってもら

った。」

僕の頭のなかで欠けていた記憶の断片が戻ってくる。

「・・・あ！思い出した！元気だったかい？」

途端笑顔になるハデス。

「エヘヘー！元気だよー」

しかし、ハデスはこんなに明るい子だったかな？そんな事を考えていると話に加わってない瀬里奈さんが入ってきた。

「ちょっと！あんた私の時雨君のなんなのよ！」

「私はねーおにーちゃんのハデスだよっ！」

「答えになってないわよっ！」

「あ、おにーちゃん。大会中はこの街のマンションに止まってね！」

「あ、僕お金ないよ！」

ちなみに僕の財布は家にある。

「えー大丈夫だよ！私が管理してるからさ！」

「で、でもさあなんか御礼しないと・・・。」

僕がそういうとハデスはニヤリ？と笑い更に僕の近くにより耳元で小さく喋った。

「じゃあ、料金もらいますね？」

それはあつという間に終わった出来事だ。
ハデスが顔を近付け僕の顔にふれた。

ちゅっ。

「なに！人が見てんのに契約しやがった！」

後ろの瀬里奈さんが叫ぶ。僕は何が起こったかよくわからなかった。走り行くハデスをぼーっと見ながら僕はまぬけみたいに一人（正確にいうと二人だ。）立っていた。

その後、瀬里奈さんは当然僕と話してはくれずずっと僕の背中に顔を押し当て黙っていた。

ハデスから言われたマンションを見つけ（この街にはマンションが一つしかなく、基本的にこの街はあまり住人がいないらしい。）中に入り管理人さんを捜す。管理人室を見つけだしノックする。

「すみません！新しく入るようになってる者ですけど。」

そう言ってから少し経ちいないのかな？と思った頃に後ろから返事が帰って来た。

「・・・あの、どちら様でしょうか？」

振り返ると黒淵眼鏡の長い髪をした人？が立っていた。・・・両腕にスーパールの袋をさげて。

「あ、実は今日からここに住む事になったらしい者ですがあなたが管理人さんですか？」

「えーと、天道時 時雨さんと霜崎 瀬里奈さんですか？」

どうやらこのマンションでよかったようだ。

「あ、自己紹介がまだでしたね！私の名前はヘイル・シュトラといいます。。ちなみにサキュバスです！」

サキュバス？何だっけそれ。とりあえず・・・こっちも自己紹介をきちんとしたほうがいいかな？

「僕の名前は天道時 時雨です。一応罪人天使です。そして後ろの人が断罪天使の霜崎 瀬里奈さんです。」

自己紹介が終わってふと、管理人さんを見てみると眼がキラキラしている。

「うれしいわ！初めてのお客様が天使なんて・・・！」

しばしキラキラしてから僕たちの部屋に案内してくれた。

「私の隣が貴方達のお部屋になっています！」

中に入ってみるとなかなか清潔感があり結構好感を持てた。荷物という荷物が無いので更に奥の部屋にいつてみると部屋が合計三つあり、ダイニングが一つあった。

一つを僕の部屋にしてもう一つは瀬里奈さんの部屋にしよう。残った部屋はまだ使わないだろうな。

「瀬里奈さん、マンションに入りましたよ！」

返事がない。ただの人形のようにだ。

「！変わり身の術？」

本物は何処に……？

シャワーの音が聞こえる。多分シャワーを浴びにいったのだろう。

「除きに行かなくていいのか？時雨。」

久しぶりに登場した天使。彼は僕の知恵袋である。（姿は僕をかなり小さくした大きさを普段は僕の肩に乗っている。）

「何言ってるんだよ！行く訳ないだろう？」

普段は僕のいう事をあまり聞いてくれないが今日は頷いてくれた。

「……そうだなあ。時雨の言う通りだな。やっぱり。」

僕は何となく天使がまえより聞き分けのある奴になったなあと思っていた……が。

「覗くならもうちょい出た人がいいな……。あんなの見たって別に嬉しくないからな。」

本人が聞いたらやつぱり怒るかな？すると本人が扉を開け、タオルを巻き腕を組んで僕を見ている。

「……時雨君、お腹空いたから何か作って！」

私かなり怒ってます！オーラを体から噴き出しながら僕に頼み事をしている。

「え、うん。頑張ってみるよ。」

僕は冷蔵庫の中をチェックして（驚く事に沢山材料が入っていた。）材料を取り出そうとしてから手を止めた。

僕は料理が全く出来ない。

その事を言おうとして瀬里奈さんの方を向くと彼女はテレビ（なかったはず）を見て笑っている。

服は着ておらずタオルのまんまだ。

「・・・あまり出てないのにタオルなんかしても無意味じゃないか？」

天使は僕に尋ねてくる。僕は苦笑してその返事をしなかった。

「瀬里奈さん、タオルじゃなくて服を着てください。」

「やだ！」

「・・・まるで子どもだな。」

天使は呆れているが僕はあきらめなかった。その後の説得で服を着せるのに成功！

「・・・実はですね瀬里奈さん。僕、料理した事ありません。」

絶句する瀬里奈さん。

「・・・すいません、今から何か買ってきます。」

そして扉を開ける。そこには管理人さんがうろつろしている。

「・・・管理人さんどうしたんですか？」

ビクツと止まる管理人さん。右を向いていた首がロボットのよう
に動きこつちを向く。

「あ、あのですね！歓迎パーティーをしますから私の部屋に来ませ
んか？私が料理を作りますんで。・・・どうでしょうか？」

料理と聞いて瀬里奈さんが部屋からでてきた。

「はいっ！ぜひとも行きたいと思います！」

管理人さんに連れられて管理人室に入る。中は僕たちの部屋とあ
まり変わりはなく、違ふ所は部屋に色々な家具が置いてあることぐ
らいかな？

管理人さんは早速調理を開始して、瀬里奈さんはテレビをつけて
笑いながら見ている。

僕は・・・管理人さんから料理を教わる為に彼女の隣に立つ。

「あ、座ってていいですよ！私が料理しますから。」

僕が来た事を手伝いにきたと勘違いしたらしい。

「いえ、実は僕料理出来ないんです。だから少しでもいいから料理
を見て覚える事が出来たらいいなと思って・・・」

僕はすまなさそうに言いながら管理人さんを見た。

「わかりました。今度また部屋に来て下さい。私が知っている事は
教えましょう。今回は座っててください。」

料理を教えてもらえるようになったのでこれからは少しでも料理

が出来るようになればいいかな？

僕は瀬里奈さんの隣に座りテレビを見始めた。

「・・・時雨君、何話してたの？」

隣に座っている瀬里奈さんがテレビに視線をあわせたまま僕に質問をくれる。

「えっとね、料理を教えてもらうようになったんだ！これで飢え死にしないでいいかな？」

瀬里奈さんの横顔は何となく不満みたいだ。そんなに僕の料理はいらないのかな？

「大丈夫！きつと上手くなってみせるからさ。そんなに不満そうな顔しないでよ！」

こっちを見てキョトンとしている。・・・僕は間違えた事をいつただろうか？

僕が一人悩んでいると瀬里奈さんが僕にまた尋ねて来た

「・・・それ私の為？」

「え、うん。そうだよ。」

今の瀬里奈さんはうれしそうな顔になっている。

「ありがとう、頑張ってたね！」

瞬間、瀬里奈さんの顔がかなりおとなびた感じがしたのは僕の気のせいではない気がした。

この人は何か隠している気がしてならない。

「時雨、こいつは化けるかもしれないな。・・・気をつけたほうが
いいようだな。」

天使も僕に警告している。

その後、運ばれてきた料理はどれも美味しいもので僕にこんなも
のが作れるか不安になった。（瀬里奈さんはずっとニコニコ顔で料
理を食べていた。）

食べ終わり、みんなであとかたづけをして管理人さんに御礼を言
う。

「ありがとうございます。」

「また来ていいですか？」

瀬里奈さんが甘える。管理人さんは頷き僕に料理を責任もってき
ちんと教えるといってくれた。

部屋に戻り、瀬里奈さんがした事はまたシャワーを浴びる事であ
った。

「覗かないでね！時雨君。」

いたずらに笑う瀬里奈さんはやはり子どもじみた顔であった。

「へ、どうせ見たってうれしくもなんともないな！」

こう言っているのは天使であり、僕ではない。

「覗きませんよ。」

そういつて僕は自分の部屋に入りベットに横たわる。（この部屋はベット一つ以外になにもない。残りの部屋も一緒である。）

そして、これからの事を考える。

（家具もあまりない。お金もないし、仕事もない。持っている物は・
・なんだろう？）

そして天使がいない事に気がついた。

「あれっ？どこ行つたのかな？」

部屋を出て探してみる。

お風呂のある所の近くに血だらけになつた天使が倒れていた。

慌てて近寄ると血だらけなのは鼻血のようだ。もしかして・
・瀬里奈さんで鼻血だしたのかな？

「まさか覗きに行つて・・・鼻血だしたの？自分は文句言つて
なかつた？」

天使は僕のほうを向き、フツと笑い（本人はカッコつけているらしい。この場合、出すのは鼻血ではなく口から血をはくものだろうに。）こう言つた。

「時雨、奴は化けたぜ。あいつは・・・お子様じゃない・・思い出
すぜ・・ぶはっ！」

また鼻から鼻血を撒き散らしながら僕の腕の中で動かなくなった。
そして天使は消えた。いつもの事なので心配はあまりしない。（
今回は自業自得だと思つ。）

僕は雑巾で血の痕を綺麗に拭いていき最後の箇所を拭き取る。

そこは風呂場の前であり中からはシャワーの音がする。

「はっ！いけない！」

僕はさっさとその場を後にしてテレビが置いてある場所まで戻った。

床に写真集が落ちていた。この部屋に居るのは僕と瀬里奈さんだけだ。つまり僕の物ではないので必然的に瀬里奈さんの物であるみたいだ。

表紙は写真集としか書かれておらず、手づくりのようだ。瀬里奈さんには悪いが少し見てみよう。

「撮った人、生徒会メンバー　舞？」

めくったページにカメラマンの事が書かれていた。・・・どこかで聞いた名前である。

うんうん唸っていると写真集が取り上げられてしまった。

「・・・時雨君、何見てるの？」

正直に謝ろう。

「ごめんなさい。落ちてたから気になったんだ。誰の写真集かなって。」

瀬里奈さんは赤くなり答えた。

「・・・それはね、私の大好きな人が載ってるのよ。亜美の友達に作ってもらったのよ。彼女が剣治からの仕事を頼まれた時にその人の写真を撮ったんだってさ。」

「うーん、あ、舞って誰か思い出した！」

何となく記憶が無くなっている自分が悲しくなったが、思い出したのでよかった。

「じゃ、私は寝るわ。お休み！時雨君、もし怖かったら私の所に来ていいわよ。」

うーん、お姉さんぶってるけど見た目があれだからなあ。

瀬里奈さんは扉を閉めた。僕はまだお風呂に入っていないので入って寝る事にした。

お風呂に入ったのでさっぱりになった僕は自分の部屋に戻る。ベットのの上に瀬里奈さんが寝ている。

いや、もしかしたら僕が間違っているのかもしれない。ここは瀬里奈さんの部屋なのかも。起こさないように静かに部屋を出てから反対側にある僕の部屋（だと思っ）に入る。

そこにも・・・瀬里奈さんがベットに寝ていた。

もう一度さっきの部屋に戻る。

ベットの上には何も居なかった。

「僕は少し疲れているのかな？」

そのままベットにダイブ！目を閉じて夢の世界への切符を買う。
そして、夢の世界行きの電車がやってくるのを待っていたら……
・現実に戻された。

何かが僕の上に乗っている。瀬里奈さんかな？

「あの、すいません。どいてくれませんか？」

まず頼んでみる。すると返事が帰って来た。

「私と遊んでくれたらどいてあげる。」

その声はよく透き通る物だった。

僕は仕方なく頷き、なにをして遊ぶか聞いてみた。

「何して遊ぶ？」

「じゃあ、鬼ごっこ！貴方が逃げて私が鬼役するからさ。捕まったら覚悟してね！」

罰ゲームであるのかあ。僕はそんなのんきな事を考えていた。

「時間は朝まで！」

……朝まで？そんなに瀬里奈さんは鬼ごっこが好きなのかな？

「何処でするの？」

場所がわからなければできない。

「・・・いい所案内してあげる。」

瀬里奈さん？が指を鳴らすと部屋が広大な墓地になった。

「少し経ったら追い掛けてくるからね。」

空は紅い。だが魔界ではないような紅さだ。そして月まで紅いなにもかも紅い世界。

僕は人？らしき影に話し掛ける。

「ここは何処ですか？」

「地獄。」

影は消えた。

「お兄さん、もうそろそろ数え終わるよ？本気でしないと痛い目以上をみるかもよ？」

「・・・どうやら僕は寝ぼけていたようだ。彼女は瀬里奈さんではない！」

「タイムツ！君に聞きたい事があるっ！」

「何かしら？スリーサイズ以外なら教えてあげますよ。」

「へっ、自慢出来ないくらいだからだな。」

いつの間にか天使が肩に座っていた。

確かに彼女は身長は高いがあまり胸がないかなあ？

「・・・そんなに見ないで下さい。恥ずかしいですよ。」

「あ、す、すいません！」

「ペッタンコが何恥ずかしがってんだよ！」

天使は文句ばかり口に出している。

「あの、地獄と魔界は何処が違うんですか？」
今僕がかなり気になる事を素直に聞いた。

「簡単にいうと魔界は他の世界です。つまり、同じ空間に存在している地球みたいなものです。そして地獄は死後の世界です。」

なーるほど。

「じゃああつちにいる人の影みたいな物はなんですか？」

「いわば魂ですね。死んだ人がここに来ます。」

「じゃあ、僕は・・・。」

「僕は死んだんですか？」
首を振る謎の少女。

「いいえ、貴方は死んでません。私がさっき喚びましたよ？貴方も知っているでしょう。私と遊んで下さい。」

「なんでですか？」

「惚れました。」

はい？

「ヒュー！もてるね時雨君！ペッタンコに。」

天使が僕をからかう。

「それでは、そろそろ鬼は動きますかね？……言つときますが私に捕まったら結婚してもらい、地獄を管理してもらいます。」

僕はさつさと空に昇った。

「天使！まだ僕は料理を覚えてない！そんな夫をもったらあの子が可哀相だ！だから僕は捕まらない！」

「え、それが理由か？」

「だから、だからお願いだ！力を貸してくれ！」

「分かったいいだろう。……。」

僕は少し記憶を失っている。記憶は僕の力になったらしい、何故かそれがわかる。

紅い月の手前で体を紅い光がつつみこむ。

『我は、天界を創りし始天使。そして、源初の罪人。』

悪魔の力は千夏姉さんがいないみたいだから使えないので羽は紫にならない。

紅い羽が二つ増え合計四枚の羽が紅い空にはためきだした。

地上では先程の少女が待っているようだ。

……もしかしたらあの人は飛べないのかもしれない。

それから一時間、僕は空にいる。地上では少女が手を振る回しながら文句を言っている。

「……卑怯ですよ！鬼ごっこで空に逃げるなんて！」

……確かにそうだなあ。卑怯だな。うん！

「じゃあ、僕が地上に降りてから十秒数えて下さい。それまで手出ししないで下さいね？」

「わかりました。」

華麗に地上に着地。ボーっとしている時間はない。

「1・2・」

後残り八秒。

「3 4 5 6 7 8 9・10！」

「ちょっとまってください！それは卑怯ですよ！」

走ってくる少女が自分の耳を示す。・・・耳に何か詰めているらしい。

「・・・何かいいましたか？私には聞こえませんか。」

僕は地上を走るように飛んだ。後ろから迫る鬼さん。もう少して捕まる所で異変が起きた。

鬼さんがいきなり止まったのだ。

「・・・どうやら今回は私の負けみたいです。月を見てください。」

紅い月は沈んでいる。

「・・・月が沈めばそれは朝ですね・・・。」

月が完全に沈むと辺りの墓地も消えた。

・・・僕は一人部屋に立っていた。窓の外は暗い。（ここは地下だが、昼のときはかなり明るくなる。）先程の事は夢でかたずけていいだろう。また僕はベットに潜る・・・・・・が眠れなかった。

朝になった。瀬里奈さんが先に起きて異変に気が付いた。

「・・・!？」

やはり僕は怖かったので瀬里奈さんの隣で眠らせてもらった。・
・黙って。

「うわー！それは反則ですよ！ちゃんと数えてください！」

起きた僕の顔にはクマが出来ていた。ちなみに起きた体制は最悪なもので瀬里奈さんに抱き着いていた。目の前にいた瀬里奈さんは赤くなりながら挨拶をしてくれた。

「おはよう、時雨君。・・・うれしいんだけど少し強く抱きしめすぎだな。はなしてくれないかな？」

「わあっ！すいません！」

その後僕は瀬里奈さんにこの話をした。・・・・が笑われてしまった。

「ほらっ、時雨君、テレビでトーナメントの発表があってるよ！」

瀬里奈さんは今日の試合にでなくてはいけなかった。（僕の事でもある。）

対戦相手はシスウェルという人であった。

あの地下に行くと観客が沢山いた。

省略していいぐらい長い話を聞いてから僕たちは勝負の場所に向かった。

『今回、貴方がたには鬼ゴツコをしてもらいます。』
嫌な戦いだな。

『それでは！両者入場！』
相手を見て驚いた。・・・・地獄にいた少女である。

「今度こそ貴方の心もらいますよ。」

僕に人差し指を向け声高らかに宣言する。

「・・・・あの、僕お腹痛いから棄権していいですか？」

僕は逃げ場を探したかった・・・・ただそれだけである。

「棄権はできないよ時雨君。ルールなんだって。」

僕と瀬里奈さん対シスウェルさんの鬼ゴツコの始まりは近い・・・
・・・

そのに 始まる大会は恐怖である。（後書き）

やー大変です、時雨君。以前は蕾が時雨君のところにきてましたが、今回は時雨君が怖い思いをするはめになりました。さて、遂に始まった大会。彼等は優勝できるのか！そして鼻血ぶーだった天使が言いたかった事はなんだ！この辺に注目してもらえとうれしいですね。最後に、やはり評価してもらえると嬉しいです・・・なにもしてあげられません。

そのさん サプライズゲストと鼻血ぶー（前書き）

今回は短いような気がします。

そのさん サプライズゲストと鼻血ぶー

「……じゃんけんぽん！」

鬼ゴツコはたいていじゃんけん決めてる事が多いだろうなあ。そして僕はじゃんけんがめっぽう弱い。

「あ、私が勝ちました！」

この鬼ゴツコは特殊な物で、勝ったほうが鬼がいいか逃げるほうがいいか決めれるらしい。

「じゃあ、私は鬼でいいですよ！」

『シスウェル選手が鬼のようですね。そして時雨選手と瀬里奈選手が逃げるようです！』

「じゃあ私は右から逃げるからね？」

戦場は地下ではなく近くにある学校である。

「……うん、じゃあ僕は左から逃げるから。」

『なお、鬼を迎撃して結構です。』

なんてルールだ。

僕の耳元で天使が喋る。

「じゃああのペッタンコを早いところ迎撃しちまおうぜ？」

勿論僕はその申請を却下する。

「駄目だよ。そんなことしちゃあ。」

天使は少し恐い顔になり僕に話始めた。

「時雨、お前はいつもそうだ。真面目に戦おうとしない。……言っておくが身体はお前一つの物ではないんだ。お前が傷つけば俺も痛いんだ！ タンスで小指をぶつけた時は身もだえしていた。今度からお前が傷つけられそうになったら悪いが身体は使わせてもらうからな！ いいな？」

確かに、僕は一度も真面目に相手を傷つけようとしなかった。

「……わかったよ、そのかわり相手は絶対傷付けないでね？」
ヤレヤレといった感じに首を縦に動かす天使。

「……いいだろう。それじゃ身体を借りるぞ？」

僕の意識はブラックアウト。その後なにが起こったかさっぱりわからなかった。

「……時雨君！起きて！」

誰かが僕を呼ぶ声が聞こえる。辺りからは歓声が聞こえる。

『……信じられない。大会新記録だなんて……』
ついでにアナウンサーのお姉さんの困惑した声が聞こえる。

「う、うーん？」

段々はつきりする僕の脳みそ。辺りを見渡し、どうやら廊下に座っているようだ。隣に瀬里奈さんが居て僕の目の前にはシスウェルさんが倒れている。

何があつたのだろうか？

「ビックリしたよ！時雨君があんな事言い出すなんてさあ。」

瀬里奈さんに話してもらった。

いきなり倒れた僕はすぐに立ち上がったらしい。だが顔付きが変わっていた。

『すまないが、追加ルールを付けてくれないか？』

僕はそういつたらしい。アナウンサーさんが許可をだすと僕は追加ルールを注文したらしい。

『相手を気絶させるもしくは立てなくしたら勝ちにしていいいか？』

新しいルールで始まった鬼ゴツコは直ぐに終わつたらしい。……
・なぜなら天使が僕の身体を使いいたずらしたからだ。

開始十秒、まず天使は鬼のシスウェルさんの後ろに回り込みあれを揉みまくつたらしい。……なにやってんだ。

抵抗出来ず膝がガクガクなってしまったシスウェルさんはその後、天使（僕）に足カクンをされ廊下にダウン。審判が出てきて十秒数えて終了。天使（僕）はそのままぱたりと倒れたらしい。

「時雨君があんな大胆な事するなんて……」

かなり誤解される運命にあるかな？

「だけど私の為に本気出したんでしょ？」

……本気、確かにそうだろう。

一応頷いた。……しかしいつこうに救助班が来ない。

「ねえ、なんで救助班がこないの？」

『救助はセルフサービスですよ。助けてあげたいなら自分で助けてあげてください。』

僕は黙ってシスウェルさんを抱き上げ、瀬里奈さんを背中に装備し、マンションに帰った。

せめて、管理人さんと瀬里奈さんには天使の事を話しておいたほうがいいだろう。

「あ、試合見てましたよ！やりましたね、時雨さん、瀬里奈さん。」

管理人さんははしやぎながら僕たちを迎えてくれた。

「テレビに最後まで出てました！かつこいいですね？相手を助けるなんて普通誰もしませんよ！」

「管理人さん。シスウェルさんをベッドに寝かしていいですか？ 後大事な話があるんです。」

僕の部屋にシスウェルさんを寝かして、既に床に座っている二人の元に行く。

「……実は僕、二重人格者みたいなものです。」

口を開ける二人。当然だろうなあ。だが、僕は話を続ける。

「片方は戦闘になっただらでてるんです。……つまり、本気をだしたのは彼です！ 僕は暗い記憶しかないんです。言い訳かもしれないけど信じてほしいんです！」

必死の弁明。二人共頷いてくれた。

「時雨君が嘘つくわけないから信じるよ。」

「そうですね、時雨さんは優しくそうな目をしてますからね。……ところで、先程寝かせたあの人はどうするんですか？」

シスウェルさんはどこか怪我した訳ではなく、気絶しているだけだから心配することはないかな？

「……時雨君、もしかしてさあ、朝言ってた夢に出てきた人はシスウェルの事なのかな？」

黙って考え事していた瀬里奈さんが僕に聞いてくる。

「はい、地獄で彼女と鬼ゴッコしました。」

頷く瀬里奈さん。一人話しが分かっていない管理人さんに夜の出来事を話した。地獄の事、彼女と命を賭けた鬼ゴッコをした事。

「もしかして、彼女は地獄を監視している門番ではないでしょうか？」
ゲート・キーパー

そういう管理人さんに頷く瀬里奈さん。

門番……ある使命を守る為に頑張る魔族。住む場所で力が変わり、地獄に住む門番は悪魔並の力をもつ。

うーん、確か何かの本に書いてあったと思う。

僕の部屋の扉が開き中からシスウェルさんがでてきた。

どのような顔をすればいいのだろう。

「あ、おはよう！」

……まずは挨拶からしてみよう。

じーーーーー

うわっかなりこっち見てるよ。穴があくほどみられてる。

「……君って以外に大胆なんですネ？」

とうとう触れてきたか。

「誤解です、シスウェルさん！僕は揉みたくて揉んだ訳ではないんです！」

シスウェルさんの顔がしかめっつらになる。

「・・・私では不十分ですか？」

「いえす！ざつつらいと！」

今の発言は天使であり、ぼくではない。

「そういう意味じゃなくてですね。」

天使が耳打ちする。

「俺が直接みんなに説明するよ。」

ややこしくなるから止めてほしかったが身体が乗っ取られる。

本日二度目のブラックアウトから復帰すると自分のベットに寝ていた。

扉が開き、瀬里奈さんが入ってくる。

「・・・あ、起きた？時雨君かなり大変な目にあってるね。」

どうやら天使が僕の過去をばらしたらしい。だが僕にあまり記憶は残っていない。

「・・・すいません、瀬里奈さん実は僕記憶がありません。

「ビックリする瀬里奈さん。」

「え、嘘！昔の登場人物忘れたの？」

「はい、顔をみればある程度なら分かりますが名前だけではよくわかりません。」

なんとも中途半端な記憶喪失である。

瀬里奈さんは僕に色々試してみた。

「だっちゅーの！」

「胸ないやつがしたって一緒だろっ！」

「……古いですよ瀬里奈さん。」

「じゃ、これは？お帰りなさいませ！ご主人様！」

ズキン！

……なんだ？この痛みは？僕は何か知っているのか。

何かが頭の中で繋がりが出したがまだもやもやしている。

「時雨さん！今日の料理のお勉強の時間ですよ。」

隣のへやからそんな声が聞こえる。

瀬里奈さんも僕が起きようとするのを手伝ってくれた。……胸

があたっていた事は黙っておこう。

管理人さんの部屋に入るとシスウェルさんが座ってお茶を飲んでいた。

「・・・天道時君、私は今日からこの門番になります。」

「あ、時雨でいいですよ。へえ、今日から門番？ですか。・・・具体的にしたいんですか？」

門番だから留守番みたいなものかな？

「・・・住民の安全を守ったりします。」

ぼでーがーどというやつか！

「頑張ってください！応援してますよ！」

「ありがと、天・・・いや時雨からそういわれるとうれしいな・・・まだ夜の事を覚えているかな？またいつか鬼ゴッコしましょうね？」

できれば危険じゃない鬼ゴッコがいいなあ。

今日は包丁の使い方を教わり林檎の皮を剥いた。間違っ僕指の皮を剥きそうになりヒヤツとした。

部屋に帰り、剥いてきた林檎を瀬里奈さんの前にだしてみた。

「・・・どうかな？」

「うーん、まあ初めてにしてはいいほうじゃない？」
そういつて林檎を口に入れた。

「うん、おいしい！」

おいしい食べ物を食べた時の瀬里奈さんの顔はかなり可愛くなる。

見とれていたら瀬里奈さんと目があった。

「……恥ずかしいから見つめないでよ！」

「すみません！つい……。」

気まずい雰囲気を破ったのはインターホンだった。僕は玄関の扉を開ける。そこにはどこかであった気がする人が立っていた。

「やあ！時雨君。久しぶりだね？覚えてるかな、君の親友剣治だよ。」

けんじ？……？

ペカーン！

記憶のピースがはまる感じがした。

「け、け、け、剣治！何しにきたの！」

やれやれと首を振る剣治。

「一回選突破を記念して記念品をもってきたんだ。……瀬里奈

姉さんとラブラブだったところを邪魔してすまなかったね。」

そういつて僕に渡してくれたものは大きな箱だった。

「剣治、あがないの?」

僕が尋ねると剣治は頷いた。

「……この部屋にいと色々憑かれそうだからね。」

「疲れる?」

「……いや、憑かれる。この部屋には何かあるよ。……多分君だけにしかないよ。念のため僕はあがないのさ。」

そういつて剣治はくりりと後ろを向き帰ろうとしたが。

「……あ、そうそう。この大会には裏がありそうだから気をつけなよ。箱の中身は君を助けるかもしれないものだし、君に襲い掛かるものかもしれない。……パンドラの箱を開けるのは君だから!」

そういつて帰っていった。後に残ったのはパンドラの箱とそれを持った僕であった。

中に入り扉を閉めようとして驚いた!箱が動いたのだ!

「……!??」

開けようかな?

「時雨君!早く戻ってきなよ!誰がきたの?」

瀬里奈さんに呼ばれ僕は箱を抱えて彼女のもとに少し急いで持っていた。

瀬里奈さんに剣治がきたこと、そして剣治がいった事を話した。

「ふむむ・・・一回選を勝ったから賞品をもってきたのかぁ。・・・開けてみる？」

開けちゃおうかな？

「・・・瀬里奈さん、中に入ってるの多分生物ですよ。さつき動きましたから。」

ゴクリ

「・・・今日はやめようか？」

「・・・そうですね。」

この部屋に何かある事は言わなかった。剣治が言うには瀬里奈さんには問題ないらしいから。

「・・・じゃあ私はシャワーを浴びてくるよ。時雨君、覗かないでね？」

当たり前のように頷く僕。瀬里奈さんがいなくなり僕一人になった。（隣では謎の生物が入っているらしいダンボールがあるが・・・）僕は結構気絶していたらしい。すでに外は暗い。・・・シスウエルさんが鬼ゴツコをしに来るかもしれないので悪いが寝させてもらおう。

少し疲れたな。

ダンボールの隣で寝たのがいけなかったかな。

……開けてしまう夢をみました。

ダンボールの中からでてきたのは軟体動物みたいな生命体……。

「ぱーぱー！」

「うわあ！僕はぱじゃないよ！」

『時雨君！時雨君！』

瀬里奈さんの声が聞こえてくる。

『……起きないわね。じゃあ、王子様がお姫様を起こしてあげましょう！』

王子様が？

『ん~~~~~。』

そこで夢から覚めた。代わりに目の前に瀬里奈さんの顔が迫って来ている！

「あ、う、起きましたよ？瀬里奈さん。」

目を開け瀬里奈さんは舌打ちをした。

「ちっ、あとちよいだったのに……眠り薬を買ってこようかな？」

「……………恐つ。」

「それより時雨君うなされてたよ。」

夢を思い出す。かなり怖い物が入っている気がする。
「慌てて飛び出してきちゃった。」

え、ええっ！

「あ！しまった！なにもつけてない！」

僕は鼻血ぶーでその場にバタンキュー。

「……………やれやれ、この身体で鼻血だすなんて……………。可愛い
っ！時雨君。」

夢？の中で僕は天使に説教されていた。

「……………全く！あれほどで鼻血だすなんてなにやってんだか！」

「……………ごめんなさい。」

「あんなお子様の身体で気絶なんて俺は恥ずかしい！」

「……………すみません。」

「千夏がいたらまずお仕置きはあったらろっな？」

僕が起きるまで説教は続いた。 眼が覚めると明るかった。

「……………？」

いつかのような重さが僕の上についている。またお化けみたいなやつかな？

「・・・うーん、時雨君ぶちゅー。」

瀬里奈さんが僕の上に乗っている。あれから瀬里奈さんも眠ったらしい。（身体にはバスタオルが巻かれていた）隣にはダンボールが未だに置いてあり、蓋は閉じたままであった。

「あれっ？」

横隅のほうに小さい字で何か書かれている。

『原点復帰を目指しまして、この中には時雨様が好きな職業をいれました。』

執事。』

執事？ひつじ？ひつぎ？・・・！！？

天使が笑う。

「なーるほど！俺にはこの中身がわかった！・・・やるじゃないか、あの執事さん。時雨！朝起きたら扉の向こうに何がいたかわかるか？執事さんがお前の要望を取り入れた後だ！」

思い出した！じゃあ、まさかこのなかに入ってるのは・・・。

僕は固まり、ずっとダンボールを眺めていた。

そのさん サプライズゲストと鼻血ぶー（後書き）

すみません今回かなりみじかったようです。さて、今回は時雨君が本気でした。（天使でしたが。）実は時雨君がやるうとしたら簡単にできるんですよ。そして最後にでてきたダンボール！昔の見たたら何が入ってるかわかると思います！これからも応援よろしくおねがいします。

そのよん 愛、鉄分と朝食の関係。にんにん！

さて、中に入っているのはなんだろうな？

「ごまかすな。お前は何か入っているかわかっているんだろう？」

剣治から渡された箱。

「・・・天使、聞きたい事があるんだ。」

しかしあえて今回は話をかえたいと思う。

「なんだ？」

「契約は別に・・・その、あれだよ。ブチユーてなくていいんだよね？」

うーん、と唸りながら頷く天使。（やった！箱の話からそらすことに成功したみたいだ！）

「・・・そうだな。今のお前なら・・・契約する時は紙で大丈夫だが・・・出来れば相手と何かしら触れたほうがいいな。」

話しの内容は適当である。悪いがこれは罠作戦、天使が箱から興味を無くしてくれれば大成功！

「へーっ、じゃあやっぱりその・・・あれは一応したほうがいいのかな？」

「出来ればな・・・うーん、なんか話してたら眠くなったなあ。」
天使は静かに姿を消し、残ったのはガッツポーズの僕と箱、そして僕にしがみついている瀬里奈さんだけである。

時間帯は早朝。僕は朝の空気が吸いたくなつたので外に出て散歩に行くことにした。

静かな一人街を歩く僕。始めは快調だった足も今は重い。

・・・見られている気がしてならない。

今は高いビルの上から僕を見ている。飛んで確認すればいいが、間違いだったら相手にわるい。それにもうすぐマンションだから僕が我慢すればいいのだ。

気配が僕の後ろに回る。

「?・・・!？」

気配が今度は前に行く。目の前に現れたのは敵対心剥き出しの大きな竜だった。

「僕にはムツゴウさんみたいにどんな動物とも仲良くなる自信はないよ。」

竜に説得を試みる。そして竜に言葉が通じるか謎だ。・・・文字を書いて渡したら解るかもしれない。

竜は僕の身長の二倍ぐらいだ。色は青い。

「・・・うーん、しょうがないな。」

無駄な戦闘はしたくないし竜と戦いたくもない。もしかしたら誰かの竜が逃げ出したのかもしれない。

『我は、悲しみを背負い込みし天使。』

僕に紅い羽が生える。

歩いて散歩したかったがどうやらお空の散歩になりそうだ。襲ってくる竜を避け、空に羽ばたく。

「悪いけど飼い主さんと遊んでくれないかな？そろそろ瀬里奈さんが起きるから。」

竜は背中に生えていた羽を使い空に舞、僕をおっかけてきた。

「鬼ゴツコか。悪いけど君に構ってる暇はないんだよ？頼むからさあ。」

「きしゃああああ！汽車ああああ！」

・・・今、汽車といったような？気のせいかな？

「とにかく、また今度遊んであげるからね？」

以前追い掛けてくる。

「・・・しょうがないな。悪いけど眠ってもらおうかな？」

光剣を召喚し、襲い掛かる竜にみねうちを与える。

「てやつ！」

「きゃっ！」

竜が墜落するのを受け止め、近くの広い場所に置いてあげる。

「……ごめんね、お詫びに林檎を置いとくから食べてね?」

管理人さんに練習用に渡された林檎を竜の隣に置く。

「じゃまたね?」

僕はマンションに向かい飛び立つのであった。

瀬里奈さんが手を振りながら僕に何かいつている。

「おはよー時雨君!昨日はよく眠れたかなあ? (この言葉の裏には私の身体を見たくらいで鼻血ぶーなんて……エッチな時雨君。という意味が含まれている。)」

「昨日は夢の中で天使に説教された夢を見ました。」

ふーん、と口からなんとなく不満げな声が出される瀬里奈さんだった。

部屋の中は美味しそうな臭いがしていた。

「……実はあさごはんつくたんだ!」

へえー瀬里奈さんが?

「じゃあ遠慮なくいただきますね?」

まずみそ汁に手をつける。……?鉄の味がするよつな気がする。

「？鉄分の味がするような・・・」

「あはははっ！貧血起こさないように鉄分いれたんだ！」

へえー成る程

僕が帰ってくる前、瀬里奈さんは目を覚まし僕がいない事に気が付く。僕が床に残して行った手紙を見て、決心をする。

『散歩に行つてきます。帰つて来たら朝食を作りますからゆつくりしてていいですよ。』
時雨

「・・・時雨君がいないから私が朝食を作ろう！」

無論彼女が料理をしたことは皆無であり、それからは血の記憶となり彼女はその事を忘れる事はないと思う。

みそ汁

「いたっ！血がみそ汁に沢山入っていつちゃった！・・・ばれな
いよね？」

目玉焼き

「またやつちやった！黄色と白と赤が混じっちゃった・・・うん、
綺麗だからいいよね？」

そんな事があつたのだ。

「瀬里奈さん、顔青いよ？・・・大丈夫？」

あれだけ血を流したのだから青い顔になるのは当然である。（しかし、どうやったら目玉焼きで血をながすのだろう？）

「う、うん。少し疲れたかな？今日は私達じゃないからゆっくり寝てるね？」

そういつて瀬里奈さんは部屋に戻って行った。

一人になり暇になった僕は先程置き去りにしてきた竜を思い出した。

「・・・ちよつとやりすぎたかな？」

外に出ようとしたらインターホンがなった。

ピンポーン！

「あ、はい！今行きます！」

扉を開けるとそこには青い布をまとった一人の少女が立っていた。

「あの～どちら様ですか？」

「ふん、朝貴様に気絶させられた竜だ！貴様に仕返しにやってきた！」

竜の仇返し。

「あ、そうなんだ！・・・人間の格好してますが？」

見た目美人、肌も透き通るぐらい白い。髪はあの竜の肌と同じくらい青いし、腰の部分まで伸びている。そしてこっちであった女の人のなかで二番目にあれがでかい。（一番は管理人さんである。）

「貴様！どこ見ている！」

はっ！しまったばれた！

「……とにかく！今すぐ私と一緒に来い！決着を付けるぞ！先程は手加減などしおつて！」

僕は竜の彼女に連れ去られ大会本部の地下に連れてこられた。

「……行くぞ！本気でこい！」

悪いが僕には戦う理由はない。話を聞くかぎり多分僕が悪い。

「……あの、朝はゴメン！急いでたからさつい……。帰っていいかな？」

「貴様は何故本気をださない？昨日見ていたぞ？あれも手加減していたな？貴様は帰っていい訳がないだろう？」

天使が現れ、僕に交代するようにもちかける。

「時雨、あの竜は本気だ。多分、お前をバーベキューにしてぱくつと食べてしまうにちがいない。……。今すぐ俺と変われ、いや変わらせてもらおうか？」

僕には抵抗する力無く身体を乗とられた。だが、いつもと違い意識はなくならなかった。

『じゃあ始めようか？』

「やっとまともな顔になったな、いいだろう！」

竜さん（仮名）はどこからか竜の鋭い羽を出し目の前に構えた。すると羽は大きな斧になった。

「・・・貴様はあの武器を出さないのか？」

『・・・ルールを決めていいか？』

相手の質問に答えずに天使はルールを決める気だ。

『お前は俺を倒せばいい。だが俺はお前を倒さない。』

「また手加減か？」

『いや、違う！・・・俺の剣がお前の頭に当たったら俺の勝ちでいいだろう？』

天使はそういつて右腕に光る何かを召喚させる。

（は、ハリセン！）

神々しい程に光るハリセン。

『・・・それでは始めようか？』

両者一緒に動いたと思ったら次の瞬間にはハリセンが竜さんの頭にヒット！

すばあああん

『俺の勝ちだな。』

うーん、もうちょっと苦戦してもいいんじゃないかな？

「……これが貴様の本気が……。」

竜さんは片膝を地面につけ泣いていた。

「……やはり姉様が負ける程はある。」

僕の知り合いに竜の知り合いはいない。

「煮るなり焼くなり好きにしろ。」

『だそうだ。時雨後はお前が決める。』

身体が僕の言う事を聞いてくれるようになった。

竜さんは僕を潤んだ瞳で見つめている。

「……えー、ゴホン。貴方はなんで僕を狙ったんですか？」

「……貴様が大会に出ているから再起出来ないようにしようとしただけだ。」

物騒な話だなあ。

「そういえば林檎食べましたか？」

「……まあ、一応はな。礼を言う、ありがとう。」

さて、聞きたい事はもうないからなあ。

「じゃあ僕は帰りますね？大会頑張ってください。」
帰ろうとすると服の裾を掴まれた。

「ま、待て！まだ貴様は私に何もしてないではないか！」

「え？ちゃんとしたじゃないですか？質問に答えてもらったし林檒のお礼もしてくれました。」

再度帰ろうとしたが結果は同じだった。

「ま、待て！普通何か無理な事を命令するだろう？」「いや、言ってるいみがサッパリわかりませんな。」

「……何言ってるんですか？」

うつつと唸る竜さん。

「ほら！身体で働いてもらうつとか、後は……」

なんだこの人？

「竜族は倒された相手の言う事聞かないといけないのだ。」

はつきり言っただけである。こうなったら逃げよう。

「あ、あんなところに……」

竜の気を引きそうな物はなんだろう？

「何かが飛んでる！」

「え？」

振り向く竜さんを置き去りにして走りだす僕。かなり本気で走ってます！もう少して建物から出る事が出来る！

出口が何か黒い影が塞いでしまった。

「く、やはり何かじゃ駄目だったか。」

「さあ！私に何か命令しろ！」

影の主竜さんはまたもそう告げる。こうなったら適当に命令しよう！

「・・・これから好きなように動いて結構だよ！」

この命令完璧だ！・・・しかしこれは大変な間違いであった。

「・・・それではいまから自由に動かせてもらう。」

近付く竜さん。

「貴様の名前は何と言う？」

「時雨だよ？名字は天道時。」

「そうかでは今日から私は時雨殿を護る影になろう。」

竜さんが？そういつて竜さんは消えてしまった。まるで忍者だ。

「・・・帰ってお風呂にはいるのかな？」

湯舟に浸かる。疲れがなくなっていくようだ。まだ時間帯は早いのだがさつきから身体を動かしてばかりなので汗をかいてしまった。

「……身体を洗おうかな？」

ザバア。

「きゃあ！」

上から声が聞こえる。

「……なんで貴女がいるんですか？」

天井にくつついている竜さんを見つめる。

「……それは・時雨殿を護る為に……」

「……いえ、結構です。貴方は帰っていいですよ。」

ここで帰さないと僕は毎日この人に見られている生活を送る事になるだろう。

「だいたい、浴室で服着たら濡れますよ！直ちに家に帰りその服を乾かしてください！」

「……わかった。」

渋々出ていく竜さん。

「……はあ。」

ガチャ。

「時雨殿！ちゃんと服は脱いで来たぞ！」

タオルで隠してはいるが焦る！

「そういう事じゃなくてさ！」

「成る程、タオルも取れということか！」

タオルを剥ごうとする竜さんを急いで止めた僕は諦めた。

「・・・冷えますから湯舟に浸かって下さい。」

ここの浴槽は狭いので僕は只今身体を洗っている。

「時雨殿！私が洗いましょうか？」

「・・・いえ、結構ですよ。」

世の中わからないものだ。さつきまで本気で戦っていたのに今は全く違う。そういえば竜さんの名前を知らないな。

「そういえば貴女の名前はなんですか？」

笑う竜さん。

「影に名前はありませんよ。」

うーむ、どこかで聞いた台詞だなあ。

「・・・じゃあなんて言ったらいいんですか？」

「影とでも読んでくれ。時雨殿。」

ふーむ？困ったな名無しさんか。

「じゃあ・・・シャドさんでいいかな？」

無論彼女が忍者みたいだからである。

「時雨殿が良ければ私は別にいいよ。」

お風呂から出るとシャドさんはいなくなった。忍者なんだろうなあ。朝襲われた時も凄かったし、竜みたいな形と人間になれるし。うーん、僕は紅い羽を生やすのが精一杯のようだ。

箱とテレビが置かれている部屋に行くと驚愕の出来事がそこにひらがつていた。

「は、箱が開いてる！？」

ダンボールはパツカリ蓋を開けており、中身は消えている。

・・・何処だ！中に入っていたはずのメイドは何処にいった？

いたーっ！冷蔵庫漁ってる！

「・・・あの、すみません！眠って下さいっ！」

ボカリ！

不意打ちで悪いがメイドさんを気絶させダンボールに詰める。

「シャドさん！」

「なんだ？」

「今すぐこのダンボールを宅急便で人間界に送って欲しいんだよ！
宛先は霜崎剣治。」

「わかった。」

ダンボールを持ち、静かに消えるシャドさん。竜なのに忍者みたいな人である。

「時雨いいのか返して？」

「……うん、いいよ。」

未練がないと言ったら嘘になるが今はメイドさんは要らない。

「かわったな。お前は自分で立とうとしている。」

昔はメイドさんに世話してもらった気がする。

「変わってないよ。」

僕はテレビを眺めながら色々と考えたが瀬里奈さんがなかなか出てこないで様子を身に行った。

「大丈夫ですか？瀬里奈さん。」

「うーん、大丈夫だよ。」

ベットに寝ているのは瀬里奈さんではなかった。まず身長が高い。そして首の下辺りが瀬里奈さんより膨らんでいるのだ。

「……貴女は誰ですか？」

「ははっ！何言ってるの？時雨君、私よ瀬里奈。」

「嘘つかないで下さい！瀬里奈さんはそんなに胸ないです！」
固まる瀬里奈さん？

「・・・しまった！寝言で天使化しちゃったか。」

白い羽が生えている事に気が付いたが白い羽は消えてしまった。
そしてベットの上には瀬里奈さんが乗っている。

「ごめんね、時雨君。びっくりさせたかな？」

「・・・はい。」

瀬里奈さんはかなり強い天使らしい。だが、力が強いので普段は
力を抑えて生活しているそうだ。

「だから本当の姿はあっちなのよ。・・・ふふっ、大きかったか
な？」

うーん、確かに大きかったなあ。

雑談をしているとシャドさんが戻ってきた。

「始末は終わったぞ。」

そういつて静かに消えるシャドさん。

「・・・時雨君、まさか忍竜なんか飼ってるの？」

忍竜？

「忍竜とはなんですか？」

「忍者みたいな竜よ。竜は一般的に大きくなったら人間みたいになるの、ちなみに好きな食べ物は林檎よ。林檎を与えとなるとくし、情けをかけられたら情けをかけてくれた人の命令を聞くの。」

厄介な人を連れ込んだなあ。

「時雨君、あまり野良は拾ってこないでね？」

「……前にもそんな事言われた気がする。
テレビでは大会の事を言っているようだ。」

「……今回のゲストはハデスさんです。ハデスさん、よろしく
お願いします。」

「おにーちゃん！見てる？ハデスだよっ！」

「……それでは昨日の試合を見てみましょう！一番凄かった
のはやはり時雨選手ですね？倒れた相手を助ける心を持っています
から。」

「優しいからね！私がおにーちゃんを襲った事があったけどその後
私を家に泊めてくれたんだよ。」

「……優しいんですね。今度私も泊まろうかな？」

「……時雨君、当然あの子とは別の部屋で寝たわよね？」

うーん、少し記憶が曖昧なんだよなあ。

「……いや、一緒に寝たと思うよ？」

『そしたらおにーちゃんね、私を『ピーーーーー』してねそれから
『ピーーーーー』をしてたの!』

「……時雨君、それは本当かな?」

間違いなくそんな事した記憶は全くない。

「いや、そんな事した記憶はないですよ。」

『……嘘でしょう? ハデスさん』

『嘘です! おにーちゃんはそんな強引な事しません。』

『時雨選手の嫌いな物はなんですか?』

これでは僕の番組みたいだな。

『嘘が嫌いです!』

『……ハデスさん、貴女はさっき嘘つきましたね?』

『あわわわわっ! おにーちゃんごめんなさい!』

「……ふ、ざまあみなさい。」

そして、それから僕の個人情報はどうどん魔界のお茶のまになが
されていた。

そのよん 愛、鉄分と朝食の関係。にんにん！（後書き）

まあ、最近時雨君をボケから突っ込みにしたい気がします。剣治が消えてしまったので誰も止めてくれる人がおりません。さて、今回は時雨君が戦う事が多かったですね。そして箱が開いてしまいました。時雨君は送り返しました。変わりましたね。この場を借りて評価してくださってありがとうございます。

そのこ いたって平穏な一日。

テレビの内容は次の試合の選手の名前を告げた。

「時雨君また私達だよ。」

「そうですね、まあ、仕方ないですよ。僕たちの相手はどつやらシヤドさんみたいですよ。」

名無しの影と対戦相手の名前欄に書かれている。

大会本部

『さあ、二回戦始まりました！今回のお題は歴史ですっ！選手の方は今すぐ校舎にいてください！』

歴史かあ。シヤドさんなんか得意そうな顔してるなあ。

「瀬里奈さん、歴史得意ですか？」

「うーん、普通かな？」

ちなみに僕は得意科目の一つである。
僕たちの座っている机に紙が渡される。

『・・・それでは始めて下さい。時間は50分です。』

えーと、なにになに？『第一問、ガンダは何を参考にして作られたか』。

この問題難しいな。近くを見ると残りの二人は頭を抱えていた。
・当然だろう。

答えは『ザ』かな？

その後もかなり難しい歴史の問題は続き、残りの二人は頭を押さえて必死に頑張っていた。

「・・・どうだった、瀬里奈さん、シャドさん。」

暗い顔つきの二人。

「サツパリわからなかった。一番わからなかったのはブライが戦艦の指揮をとったのは何歳かだ。絵がかなりふけてたから30歳と書いた。」

「うーん、私も全くわからなかったなあ。シアの異名はなんですか？がわからなかったなあ。」

後は結果を待つだけだなあ。僕たち二人だから平均点数になるみたいだな。

『それでは！結果発表をしたいと思います！』

シャドさんはこっちに来てこういった。

「・・・時雨殿。これがおわったらちよつと付き合ってくれないか？ 買物したいんだ。」

もはやどうでもいいのかな？

『・・・瀬里奈選手、0 名無し選手 0 時雨選手 4
9 です。結果勝利者は瀬里奈選手です。』

「シャドさん、もう未練ないの？」

笑いながら頷くシャドさんの顔は幼い顔だった。

「ああ、いいんだ。影の私がみんなのトップに立つても無理だ、それに今は護るべき時雨殿がいるからな。・・・私は時雨殿より弱いからな。あまり役に立つ事はないだろうがな、だから私は時雨殿の世話をすることにしたのだ。」

うーん、清々しい笑顔だなあ。

「・・・ちよつと、時雨君。馬みたいな顔になってるよ！
はっ！しまった！」

「今回はいいもん！ 後で見てなさい、時雨君。」

そういつて帰ってしまった瀬里奈さん。

「さて、それでは付き合ってもらうぞ？」

僕の腕を強引に取り、歩き出す。

「シャドさん！ 柔らかい何かが腕に当たってるよ！」

シャドさんをみたらびつくりした。

ずっと笑っているのだ。

「さ、いくぞ時雨殿。」

その後、街でデートになったのは間違いない。
もう少しで家につくときシャドさんは話し出した。

「・・・何故、時雨殿を狙った本当の理由をいつてなかったな。」

「本当の・・・理由？」

静かに話し出すシャドさん。

「私の家族がある人物から命令を受けた。・・・夜中奇襲を
かけたらあっさり負けてしまった。その人物はな、私の家族を逃が
したそうだ。『この時雨に勝ちたいならもっと強い奴をよこせばよ
かったな！ぺったんが相手では面白くないわよ？』とまで言ったの
だ。」

・・・それは間違いなく千夏姉さんだな。

「シャドさん、ごめんね。」

一応謝ろう。

「ふふつ。別にいい。」

真剣な顔になるシャドさん。

「・・・私を貴方の影にして欲しい。」

そしてもしもじしながら更に答えた。

「……その、なんでもするからな。時雨殿が望むならな。」

「……じゃあシャドさん、これからもよろしくね?」

ぱあっと明るくなるシャドさん。

「いいのか! 私は時雨殿を襲ったのだぞ?」

「じゃあなんで僕の影をやったの?」

「あれはお試し期間だ!」

知らなかったな。

「時雨殿がいいなら契りを結ぼう。」

ちぎり?

「わかんないからシャドさんがやってくれるかな?」
顔が赤いシャドさん。

「そ、そうか。まず目を閉じて欲しい。」

こうかな?

「へっへっへ、時雨。よかったな?」

どういう意味かな?

「……それでは行くぞ?」

「……！？んっ！」

シヤドさんが僕を抱きしめてくる。

「時雨はよくやるよ、紙でもいいのにな。」

目を開けるとシヤドさんは消えていた。

「あれっ？」

「奴は影だろ？影は主人を護るものだ。名前を呼べば出てきてくれるさ。」

成る程、知らなかったなあ。

家に帰るとあの瀬里奈さんが仁王立ちで僕の帰りを待っていた。

「あ、ただいま瀬里奈さん。どうしたの天使化なんてしちゃって。」

身長は高くなり整った顔は妖しく笑っている。

「……これなら時雨君も文句ないでしょ？あの忍者並に胸あるんだからさ！」

「な、何言ってるんですか！瀬里奈さん。」

ニヤリと笑う瀬里奈さんは怖い。例えるなら死神が笑いながら将棋をしているぐらい怖い。（意味がわからないな。）

「……さつき忍者とキスしてたでしょ？」

うーん、確かにしたような気がする。

「・・・私が近くに一番居るのに時雨君は新しく出てくる女の子とばかりキスしてさあ！今日は許さないから！」

せ、瀬里奈さんの身体から怒りのオーラが湧き出てる！

「・・・覚悟なさい！時雨君。」

「話を聞いて下さい！瀬里奈さん！」

瀬里奈さんに玄関で押し倒された。

ピンポン！ガチャ。

「やあ、時雨君。この時間からいちゃいちゃかい？相手は誰かな？・・・天使化した瀬里奈姉さんか。」

そういつて扉を閉じた剣治。

「終わったら言ってくれ。」

止まっていた時間が動き出す。

「落ち着いて下さい！」

「問答無用！」

シャドさんは助けに来てくれなかった。

『我と契約し罪人よ！契約を破る事があれば罪人を更に紅く染めよ！』

「・・・んーん！」

その頃、外にいた剣治は。

「やれやれ、時雨君は女難だなあ。」

「さて、契約したからこれから時雨君は他の女の子と契約したら羽が更に紅くなるわよ？」

天使化を解いた瀬里奈さんは・・・大人のままだった。

「な、なんで幼くならないんですか？」

「おいおい、突っ込む所は違う所だぞ？」

天使がそう言うが僕にはそっちのほう気になった。

「・・・うふふ、誰かと契約したら力が安定するんだ！だからこれからはずっとこの身体でいれるんだ。」

「小さいほうがよかったな。（ぼそっ）」

ニヤリと笑う瀬里奈さん。

「大丈夫、いつでも小さくなれるからね？・・・時雨君て小さい子がいいんだ？」

「いえ、そういう事じゃないんです。」

ギャーギャーと騒いでいると剣治が入って来た。

「さて、中で話をしようかな？二人共。」

「時雨君、君は箱を送り返してきたね？あれはなんでかな！」

何となく怒っているような剣治をみるのは初めてだ。

「僕は少しだけでいいから自分の足で立ちたいんだ！」

ふっと笑う剣治。

「そうか、じゃあ一緒に来てくれ。瀬里奈姉さんはそこにいてくれ。」

「

剣治に連れられ外にでる。

「・・・時雨君は捨てられたメイドがどうなるか知ってるかな？」

「うーん、わからないな。」

剣治が指差す方向をみてびつくりした。

「・・・野良メイドになるんだ。」

箱に入り

「拾って下さい」

と叫んでいる。誰も見てないと知るとダンボールからでてきた。そしてダンボールの中から何かを取り出し変装する。

「・・・泥棒になった。」

みるからに怪しい人がいる。

「さて、時雨君はいつからそんなに心が荒んでしまったのかな？」

メイドさんを見ていると心が痛む。

「く、わかったよ！説得してくればいいんだよね？」

僕は見るからに怪しい人物に話し掛けた。

「あのう、すいません。」

びくつく泥棒。

「なんですか貴方は？警察さんですか？私はまだ何も盗ってないから捕まえる事は出来ませんよ！今からあのマンションの部屋に忍び込もうとしてるだけです！」

指差す方向には僕と瀬里奈さんが住んでいる部屋があつた。

「・・・なんでそんな事をする予定なんですか？」

「実は食べ物を探していたら後ろからガツンとされて記憶が無くなつたみたいなんです。生きる為にはもうこれしかないんですよ！」
犯人は間違いなく僕だ。

「・・・わかりました。僕の住んでいる所に来てお手伝いさんになつてください。」

「いいんですか？」

「・・・悪いのは僕だ。」

「はい、いいんです。」

瀬里奈さんが僕を串刺しにしようとしなければいいんだけどなあ。
剣治は手を振り帰って行った。

僕も覚悟を決めて部屋に帰る。

「た、ただいま瀬里奈さん。」

「失礼します。」

「じゅじゅじゅじゅ」

「ひえっ！瀬里奈さん！危ないですから手に持っている大きな包丁を下ろして下さい！」

「……時雨君、少し話があるわ。ちょっと来てくれないかな？」

串刺し所かミンチになりそうだな。

「なあんだ！そうだったの？」

瀬里奈さんを納得させる事に成功！明日も僕は元気に生きる事が出来そうだ。

「じゃああのメイド名前は何て言うの？」

メイドは困った顔になり知らないことを告げた。

「……わかりません、私記憶がないから……」

うーん、とうなる瀬里奈さん。

「……じゃあ名前を考えるわね？そうね、メイってどうかな？」

メイドのメイ？かなり適当じゃないかな？

「・・・メイ、いい名前ですね。」

これで決定してしまった。

メイさんは背の高い瀬里奈さんと同じくらい高い。あれは瀬里奈さんに負けるだろう。髪はポニーテールである。

「・・・はあ、まあいいかな？」

部屋は残っていた部屋を使ってもらうことにした。
しかし問題がひとつある。メイさんに払える給料はないのだ！

「・・・あの、メイさん。悪いけど給料払えないんです。」

「結構です。拾ってもらったからそれだけで十分うれしいんです。」
「・・・すみません。」

そして夜。自分のベッドに寝転がりぼーっとしていたら何かがつてきた。

「うわっ！なんだシャドさんか。」

シャドさんは僕に頭を下げた。

「・・・すまん、時雨殿。あれからコンビニに行っていたのだ。」

だから助けてくれなかったのか。

「・・・なんでですか？」

もじもじするシャドさん。

「・・・私は、その、始めてあんな事したから・・・恥ずかしくなったから・・・。」

成る程、恥ずかしかったからいなくなったのか。

シャドさんは僕の隣で寝転がり始めた。

「シャドさん。な、何やってるの？」

赤くなるシャドさん。

「これも時雨殿を護る為だ。・・・ただ一緒に寝たいと思った訳ではない。それに・・・その、時雨殿があれを望むなら・・・。」

話がおかしいほうに向かっている！何とかせねば！

「あははっ！ちょっとトイレに行ってくるよ。」

危なかった。あのままいったらどうなる事が・・・。

深呼吸してまた部屋に入る。

「・・・スースー。」

あれ？シャドさん寝てる？

「時雨、早く寝よう。」

天使が耳元で喋る。なぜかその声は面白そうである。

「・・・うん、わかった。」

シャドさんの隣に寝た。近くにはシャドさんの顔がある。・・・
気が変になりそうだ。

突然、部屋の扉が開いた。

瀬里奈さんが身体から凄いオーラを出している。

「・・・時雨君、一緒に寝ない？ ゆっくり寝れるわよ。そしてず
ーっとね。」

僕は震えながら首を横に振った。

「い、いえ！ 大丈夫です！ 僕もう高校生だから一人で寝れます。」

瀬里奈さんは僕の隣を指差した。

「・・・じゃあこれはなにかなあ？」

言い訳も出来ない。

「あわわっ！」

僕は瀬里奈さんに連れ去られた後、彼女のベットに押し倒された。

「ひひひひひっ！」

もはや瀬里奈さんではないような気がしております。

．．．嫌な夢を見たなあ。瀬里奈さんに襲われる夢だ。

隣ではシャドさんが寝息をたてながら横たわっている。服がはだけてるっ！

「おはよー時雨君。よく眠れたかなあ？」

瀬里奈さんが入ってきた！急いで布団を被せて隠す。

「ああああ。おはようございます！」

「？うん、おはよう。朝食が出来たらしいから早く来てね？」

そういつて部屋を出ていく瀬里奈さん。．．．危なかった。

「．．．うーん。」

布団からシャドさんはい出てくる。

「．．．シャドさん、早く服をきちんと着てください。」

「わかった。時雨殿！」

服をきちんと着たシャドさんは消えてしまった。後で何か食べてもらおう。

今日は大会がなく、一日自由であるので料理の勉強をしに管理人さんのところに向かう。

「あ、時雨さん。料理の勉強に来たんですか？」

「はい、お願いします。」

中にはシスウェルさんが何かしていた。（管理人さんと一緒に住んでいるようだ。）

「編み物ですか？」

頷くシスウェルさん。赤い毛糸で長い何かを作っている。多分マフラーである。

「時雨の首を絞めようと思って作っているの！」

それはそれはかなり物騒な編み物ですね。

そして今日はフライパンの使い方を習った。

いたって平穏な一日であった。

そして夕方。シャドさんと共に買い物に行く。（お金は大会本部から送られてきた。）

「うーん、シャドさん何か食べたいものあるかな？」
静かに隣に現れ返事をする。

「時雨殿、私は林檎が食べたい。」

林檎？

「わかったよ。じゃあ持ってきてほしいな。」
「わかった。」

消えてしまったシャドさんの帰りを待っていると長くて黒い帽子（魔法使いがかぶるような奴）を被った人がこっちにやってきた。普段から見ているが、その人は僕を見ている。

「・・・あのう、僕に何かようですか？」

微笑む謎の魔法使い。

「これは失礼。ふふつ、なかなか美味しそうな身体ですね？・・・冗談です。私の名前はイクス・リベナ・マッカード二と申します。以後おみしりを・・・時雨さん？」

「はあ、よろしく。」

イクスなんたらーマカード二さんはそういつてどこかに行ってしまった。

「とうとう魔女が出てきたか。そろそろファンタジーに変わったらどうだ？」

「天使、今日はマカード二を買って帰ろう。」

「時雨殿、林檎を持ってきたぞ！」

「シャドさん、何もワゴンごと持ってくる必要はないと思うよ？」

「そ、そうか？じゃあ返してくる。」

まだ、これから何かが起こるかもしれないな。

そのこ いたって平穩な一日。(後書き)

今回は大体キャラが出揃った感じに仕上がりました。

そのろく 真面目な時雨！

今日の晩御飯はマカロニの入ったスープである。（ちなみにシャドさんは林檎を沢山食べている。）

「・・・へえ、やっぱりメイさんは料理がうまいですね。」

食べながら感想を口にだす。

「ありがとうございます！時雨様にそういつてもらえるとうれしいです。」

そういえばマカロニを食べて思い出した。

「誰かえーっとなんて名前だったかな？イクス・・・．．．．．なんとかマカロニって名前の魔法使い知っている人いるかな？」

天使が僕に話し掛け、訂正を促す。

「イクス・リベナ・マツカローにだ！お前だってじあめとか呼ばれたら嫌だろう？」

確かに嫌である。

「じゃなかった。イクス・リベナ・マツカローにだった。」

瀬里奈さん、シャドさん、そしてメイさんが頭をひねる。

「うーん、知らないなあ。」

「私も知らないな。」

「私は記憶がないのでサッパリですね。」

ピンポン！

誰か来たみたいだ。メイさんが走って行き帰ってきた。

「剣治さんと申す人が時雨様にようがあるそうです。……どうしますか？居留守使いますか？」

「いや、いいよ。じゃあちよつと行ってくるね？」

コップに入っていた飲み物を少し飲み、僕は剣治に会いに席を立った。

「……私は喉がかわいたな。少し飲み物がのみたいから何かくれないか？」

「すいません、いまちようど切らしたところです。」

「え、私も何かのみたいなあ。もう残ってないの？……あ！シヤドあんた時雨君の飲もうとしてない？」

「別にいいだろう？時雨殿はまだ帰ってきてないからな。それに時雨殿は優しいからそのぐらいで怒るはずがないだろうに？」

「時雨君に甘えないでよ！彼は私の物よ！」

ギャーギャー！

僕は外に出て剣治に会った。

「・・・時雨君、どうやら君は魔法使いに会ったみたいだね？」

「うん、なんか『私は偉いぞ』オーラが身体から滲み出ていた気がしたよ。」

うんうん頷く剣治。

「イクスはお高いところがあるからね、彼女は魔法使いの中でも屈指の実力を持っているんだ。大会優勝候補の一人だよ。マダンも使えるそうだ。彼女は異名をもつてのさ。」

「異名だつて？」

「ああ、『五月雨の蒼い月』という異名さ。」

「・・・無駄に長くないかな？」

剣治は最後に僕に注意した。

「・・・彼女を必ず立ち直れない程ボロボロにしてくれ！絶対だぞ？もし守れないなら人間界を潰してナマコの世界にするからな！」
「なんでそんなに怒ってるの？」

かなり珍しい現象である。剣治は普段かなり冷静だし、隠れた優しさを持っている。

「・・・彼女の為だ。少しお高くとまりすぎだ。ナマコ世界にした

後は大罪人になつても彼女をこの世から葬り去る！」

「・・・お化けになつたら？」

「念仏唱えて消えてもらう！奴は一度心に傷をおうべきだ！」

そういつて走り去つた。

部屋の中ではまだ乱闘が続いていた。

「・・・よこしなさいよ！それは私が飲むの！」

「嫌だ。時雨殿の湯飲みは私のものだ。」

「あわわわわっ！」

部屋の中は戦場だ！本やら包丁が飛び交っている。

「ちょっと二人共やめてください！時雨様が固まっていますよ？」

僕は何となく穴があつたら隠れたいなあと思った。

戦場は散らかっている。

「し、時雨君これは誤解よ？飲み物を争つてたの！」

「そ、そうだ！飲み物が無くなってたから争つてたんだ！」

僕は溜息を出してもう一度外に出ることを決意した。

「・・・メイさん僕、飲み物買ってくるよ。帰って来る前に出来れば片付けといてほしんだけど？」

「はい！時雨様、まかせてください！私は貴方のメイドだから頑張ります！」

僕は早速飲み物を探しに旅に出るのであった。

「メイ！あんた何時雨君に色めき立ってんの！」

「そうだ！何してんだ！」

「誤解ですよっ！ただ二人より頼りにされているだけです！」

ギャーギャーギャー！ 夜道を一人歩いていると声がした。

「お一人で夜道を歩くと危険ですよ？時雨さん？」

声の主は空にいた。

「あ、イクス・リベナ・マツカローニさん！」

ほづきに乗って僕を見ている。その、スカートが風で動いたびに・
・白いパンツが見える。それに気が付いたみたいでおりてきた。

「・・・どこ見てんですか？」

「・・・その、何となく。」

ふん、と鼻を鳴らし僕に告げる。

「まあ、いいでしょう。貴方達の今度の相手は私です。まあ勝つ事は出来ないでしょうけど頑張って下さいね？」

おーほっほっほっほっほっほっほっほっほっほ

疲れないんだろうか？

ほっほっほはあ。

やっぱり疲れるだろうな。

「・・・あの、何か飲みます？ジュースぐらいならおくれますよ？」

「・・・まあ、貴方がどうしてもっていうならもらってあげましょう。」

声がかれている。

僕は近くにある自販機でジュースを買いに行った。

・・・あの人はどんなジュースが好きなんだろう？えーい、直感を信じよう！

僕は目を閉じた。

・・・・・・見えるっ！そこお！

ピッ！

ガタン！

出てきたジュースはレモンジュースであった。

取り出したらもう一つでてきた。

「・・・？なんでだろう？」

「オレの奢りだ。兄ちゃん、頑張りなよ？彼女が待ってるぜ。」

いきなり自販機が喋りだした？

「はあ、ありがとうございます。」

「ふ、遠慮はいらねえな。人呼んで、浜辺の切腹だぜ？覚えときな。」

一礼してイクスさんのもとに行く。

「はい、イクスさん！」

「イクス様とおよびなさい。」

「はいはい、わかりましたイクス様。（やれやれ。）」

「はいは一回。」

「はい。」

イクスさんは少し浮いたほうきに腰掛け飲み始めた。

「・・・私の好みを知っていたのか？」

「どうやらレモンが好きらしい。上機嫌である。」

「・・・ははっ。」

「時雨さんもレモンが好きで？」

「お高い雰囲気はなくなっていた。」

「まあ、大好きだよ。」

「そう、ありがたく思つて、お礼を言つてあげますわ。」

素直じゃない人である。

「はい、ありがたい幸せです。」

「ふふつ。ありがとう!」

そういえばなんで剣治はイクスさんを嫌つていたんだろう?

「あの、一つ質問していいですか?」

「一つだけならな。」

「剣治との間に何かあつたんですか?」

「・・・その質問は私に勝つたら教えてあげるわ。」

ほつきにまたがり去つていくイクスさん。今回はなかなかスカートの中身は見れなかった。

「・・・やっぱり白いな。」

「・・・うん、そうだね。」

僕は天使と男の友情を深めたのであつた。それから飲み物（お茶）とおちやつぱを買つて家に帰り着く。

「ただいまあ!みんな買つてきたよ?」

室内は完璧にピカピカ。どうやらみんなで掃除場所を分担したようだ。

「時雨君、私のした所はかなり綺麗だよな?」

「はい、綺麗ですね!いやゝ凄いですよ。」

歩く度に転びそうになるぐらいすごい。次はメイさん、やはり彼女はメイドさんだから掃除もすごくうまい。

「どうですか時雨様？」

「うん、流石だね。」

テカテカ光っていて眩しい！

そして最後にシャドさん。

「・・・すまん、時雨殿。あまり出来なかった。」

他の二人に比べるとあまり綺麗になってないが頑張つてやってくれたのは物凄く伝わってくる。

「いや、充分頑張ってくれたよ。さ、お茶買ってきたから飲もうか？」

そしてみんなが寝てしまった後、僕はなかなか寝れなかった。

「うーん、時雨殿。むにゃむにゃ。」

僕の隣ではシャドさんが寝ている。少しいたずらしたくなった。頬つぺたを突こうとして指を伸ばすと・・・。

ガブッ！

「・・・いつつ！」

ガジガジ。

「あだだだっ！」

ぺっ！

「うわあよだれまみれだ。」

悪い事はしてはいけないなあ。僕は起き上がろうとしたができない。足がシャドさんの足に絡まっているような状態である。

「あれ？こうかな？」

なかなか離れない。

「時雨殿！危ない！ふにゃあ！」

がばっ！

「のわあ！」

シャドさんが上に乗り・・・完璧に起きる事は出来なくなつた。目の前にはシャドさんの顔がある。吐息を感じてなんかやばいような気がしてきた。頑張れ！僕！

「時雨殿〜。」

がばっ。

「うわった！あたってるよ！シャドさん！」

それから朝になるまで僕は頑張った。気合いで。
だが、明け方になると天使に頼み気絶させてもらった。

「うーん、うーん、うーん、うーん。」

「時雨殿、朝だ！」

「うーん、あれっ？」

がばっ。

僕は辺りを見回してシャドさんの顔を見つけた。・・・何かが
おかしい。

「朝食が出来たから起こしにきたんだ。」

エプロン姿である。ぼーっと眺めていると不満げな顔を僕に向
けた。

「そんなに似合っていないか？」

「いや、似合いですよ。反則です。」

朝から貴重なものをおがましてもらったな。

「じゃあシャドさんが朝食作っただんですか？」

「ああ、そうだ。私が作ってみた。」

悪いが不安だ。まさかそのまんま林檎が出てくるかもしれない。
テーブル（いつの間にかこんなものがあるんだろう）にはすでに残りの二人が座っていた。なぜか悔しそうである。

「悪いが二人には眠り薬を飲んでもらった。……今日の朝食を作る権利は私しかなかったのだ！」

「卑怯よ！シャド。」

「そうですね！」

「負け犬がなんと言おうと負けは負け！おとなしく私が作った朝食をたべろ。」

朝食はかなり普通であった。パン、林檎ジャム、林檎ヨーグルト、
林檎ジュース、ウサギさん林檎なんと全て手づくりらしい。

「昨日の掃除では不覚をとったからな。」

「へえー頑張り屋ですね。」

「時雨殿に言われると照れるな。」

悔しそうな二人は味が美味しいので文句も言えないようだ。

大会の番組が始まる時間なのでテレビをつけると大会の番組がすでに始まっていた。

『さて、今回のゲストはイクス・リベナ・マカロニさんです。』

『・・・どうもイクス・リベナ・マツカローニです!』

『イクスさんは優勝候補ですが次回相手となる瀬里奈選手はどう見ますか?』

『まあ、その子余裕かしら?』

パキッ! 瀬里奈さんの箸が二つに折れた。

『じゃあ一緒に相手となる時雨選手は?』

『・・・まあ、大丈夫だと思いますが?』

プッン!

瀬里奈さんはテレビを消してしまった。

「時雨君、行くわよっ! あのお高い魔女っ子なんて私が白はた振らせてみせるわ!」

瀬里奈さんはかなり大切な事を忘れている。

「・・・瀬里奈さん、大きなまんまでいったら大会に出れないから小さい瀬里奈さんになってください。」

「あ、そうだね。ちょっと小さくなるから部屋にいつてくるね。」

扉を閉めいなくなる瀬里奈さん。

「・・・どうやって小さくなるのかな?」

「スモール イトじゃないか？」

「あー、有り得ますね。」

そんな話を話していると瀬里奈さんが小さくなってでてきた。

「時雨君おんぶして！」

「わかりました。早く行きましょう。」

「ふん、自分だって甘えてるじゃないか。」

瀬里奈さんはアツカンバーをして僕の背中に飛び乗った。

「瀬里奈！いつきまーす！」

手を振るメイさんに見送られて僕は大会本部に歩いていった。
いつものようにシャドさんはどこかに消えた。）

「久しぶりだね、時雨君におんぶしてもらったの。」

「そうですね、今は急成長しちゃったから無理ですね？」

途中、浜辺の切腹さんに会った。

「妹かい？ボウズ。」

「いえ、お姉さんです。」

「こりゃまたロリなお姉さんだ。これから遊園地かい？」

瀬里奈さんが不満そうに浜辺の切腹（自販機）をみている。

「まあ、そんなもんです。」

「そうかい、またきなよ？おまけするぜ？」

「ありがとうございます！」

大会本部の前で瀬里奈さんは浜辺の切腹について聞いてきた。

「あれ、何？」

「浜辺の切腹さんです。昨日ジューズを買ったらおまけしてくれたんですよ。」

「ふーん。」

『さて、残り選手もかなり減ってきました！今回の試合は優勝候補同士の戦いです！お題は巨大迷路ですっ！』

巨大迷路？まあ、とりあえず頑張らないと人間界はナマコの世界になってしまっただけ？

『妨害結構！その代わりふざけた真似したら覚悟してもらいますよ？それではスタート！』

瀬里奈さんは突っ走っていった。迷子にならなければいいけど。

「時雨さん、貴方には消えてもらいましょうか！」

不思議な杖？を取り出し僕に突き付ける。　今回は……今回は必ず今の僕で勝ちたい！

「イクスさん、僕は貴女を傷付けずに必ず勝ってみせます！」

「いうじゃない、それじゃあ覚悟してもらいましょうか？」

イクスさんは呪文を唱え始めた。

「時雨、倒すなら今だ！早く天使化すれば一瞬で決着はつく！」

「……いや、僕は彼女を傷付けずに勝つ！」

「ならせめて天使化だけはしとくんた！」

『我は、紅き悲しみの天使。』

『太古の洪水よ我の前に立ち塞がる愚かな者を流してしまえ！』
杖の先からめっちゃ変な顔の犬？が現れ、僕に襲いくる。

ずばっ！

僕は水の塊の犬を薙ぎ払う……ハリセンで。

「やるじゃない、次いくわよ？」

これまでかなり変な顔の動物を切り捨てた。辺りは水びたしである。

「な、なかなかやるじゃない？そろそろ本気だしたげる！」

「……そうですか、それでは僕も本気出しますよ。」

まず、僕の耳には彼女の唱える呪文が聞こえる。

「……全ての母、水。今ここに集まり判決を罪人にくだせっ！」

「我は、始まりの罪人、そして戦争の終わりを告げる天使！」

大きななんとも可愛くない竜が僕を飲み込もうとする。僕はハリセンを横におもいつきりたたき付けた。

バシャーン！

竜は洪水となりイクスさんを飲み込もうとした。彼女が慌てて逃げるが間に合いはしなかった。

「……時雨、いいのか？溺れ死にするぞ？」

天使がそういつてくる。僕は黙って洪水を眺めていたが溺れ死にしそうなイクスさんを見て、やはりハリセンを振ってしまった。

水は上に吹き飛び、雨となった。イクスさんは迷路の真ん中で気絶していた。大量に水を飲んでしまったようだ。お腹を押すと口から水が出てくる。

「上等だよ、時雨君。君はよくやってくれた。」

どこからか剣治の声が聞こえる。

僕が黙っていると剣治はなお続けた。

「後は君の判断に任せるよ。なあに命なんかいらなから安心してほしい。……早く助けないと彼女はドゼエモンになってしまうよ？」

段々顔が青くなるイクスさん。だが、僕はなかなか動けなかった。

「……『悪魔は忠告はするが誰も助けはしない。』誰かに聞いた事があるかな？」

すると僕はイクスさんを助ける行為をした。何故身体が動かなかったかわからないが今はしなければいけない事がある。

心臓マッサージと人工呼吸だ！

僕は手慣れた感じで手早くそれを行った。身体がなれているみただ。

「ごほう！」

口から金魚を出してイクスさんは息を吹き返した。金魚は空に駆け上がり、消えた。

僕は濡れてしまったイクスさんの服を乾かす為にハリセンを振りまくった。

「は、はーくしょん！」

巨大迷路にイクスさんのクシャミが響き渡った。

・ ・ ・ ・ ・ 多分、彼女は風邪をひくだろうな。僕の羽はまた紅く
なった。なぜかはわからない。

そのろく 真面目な時雨！（後書き）

なんかかなりコメディーじゃ無くなってるような気がするの僕
だけでしょうか？さて、前回の後書きはかなり適当になってしま
いました！ごめんなさい！今回は真面目な時雨君を書いてみました！
どうでしたか？よければ感想を書いてくれるとかなり嬉しいなあと
僕は思います。（贅沢でありますな。見てくれるだけで僕は嬉しい
です！）

そのなな 優勝したのは男？（前書き）

なんとなく終わりが近付いてるような気がします。

そのなな 優勝したのは男？

今、はまっているのはなんですか？僕は服を乾かす事にはまっています。（多分違います。）

僕は今、イクスさんのローブ？という服を乾かしています。・・・
・・・振り回して。

イクスさんは裸ではなくきちんと下着は付けてました。そして僕の服を着てます（ちなみに学ランです。）学ランの前が開いているのでときおり見える肌は白く、雪みたいであります隊長！

「あまりこっちに風を送るな！風邪ひくでしょう！」

怒られてしまった。なんか僕おかしくなったかな？

「イクスさまあ、僕の頭を殴って下さい！お願いします！」

「（びくっ！）わ、わかった。ありがたく思えよ。」

ゴチン！

思考は良好になったみたいだ。僕はさっさとローブを乾かしてイクスさんに渡す。

「はい、終わったよ？」

「ああ、すまないですね。」

いまだに誰かがゴールしないので続いている。

「さて、なんで剣治と仲が悪いかわせて下さい。」

「・・・まあ、いいでしょう。特別に教えてあげます。」

彼女と剣治は知り合いらしい。

彼女がある日剣治に会いに行くと剣治はずーっとフィギュアを触っていて魔界の重要書類に全く手を付けなかったそう。それに怒った彼女は魔法を使い、美少女フィギュアの顔だけをガンムにしたそう。そして剣治は怒り狂い彼女はさっさと魔界に帰ったそうである。・・・多分これは剣治が間違いなく悪い気がする。

（ちなみに重要書類の中身はマオウの事だったらしい。）

「・・・時雨さんどっちが悪いと思うかしら？」

どっちもくそもない。悪いのは剣治である。

「確かに悪いのは剣治ですね。」

「そうよね！悪いのは剣治よね？」

だが・・・。

「イクスさんはまず言葉で伝えたんですか？」

首を横に振るイクスさんは全く悪びれた様子はない。

「だってあの状態で話し掛けても無駄ですもの。」

もつともだと思うがやはりいけないと僕は思う。

「・・・今度剣治にあつたらあやまってください。」

カチンときたと思われるイクスさんが口を開く前に僕がイクスさんの口を手で封じた。

「もがつ！」

「……いいですか、どちらが悪いんです！今度剣治にも謝ってもらいますからお願いします。」

まだ何かいいたげな顔をしたので更にいいまとめる。

「……白状しますが僕は剣治から貴女を……消して構わないと言われましたが……消すことは出来ませんでした。それに剣治ももうそこまで怒ってませんし、謝るなら今しかないんです！」

渋々承諾するイクスさんを見てほつとした。

そして僕はイクスさんから口を離した。

「……しかし、剣治が何処にいるかわからないのですよ？」

剣治は間違いなくこの巨大迷路のどこかにいる！

「さつき、声が聞こえました。彼はこの巨大迷路の中にいます！さあ行きましょう。」

僕は横になっているイクスさんを立たせたが……。

「痛っ！」

先程の洪水で足をくじいたらしい。ほうきは大会本部に置いてあるので空を浮く事もできない。仕方ないので背中に背負う事にした。

「ちょっと！何をするの！」

「怪我してますから背負いながら剣治を探します！」
えええっ！と言う声が背中から聞こえる。

「私は歩けます、だから降ろしなさい。」

無理をしているのはすぐにわかる。

「遠慮しないで下さい。」

黙るイクスさん。僕は歩き出す。

カチッ！

巨大迷路のトラップを踏んでしまったようだ。

後ろから大きな何かがやってきた。

だだだだだだだだだだだだだだだだだだ！

「時雨さん！後ろからバッファローがたくさんこちらにやってきます。」

よくあるよくある。

「魔法を唱えたいけど力が入りません！」

ボスの手前でMP切れ。よくあるよくある。

「くっそー！」

僕は全速力で走り出した。

「イクスさん、すっかりつかまっててくださいっ！」
「わ、わかりました。」

どこかに隠れる場所はないかな？・・・あ、あった！穴の中で剣治が手を振っている！

もう少しで穴に入れるところで後ろのイクスさんが叫ぶ。

「もう駄目だ！もうちょっとで串刺しになってしまっわ！」

くそう！そして僕は何故か契約を思い出した。確か契約したら力が安定するはずだ！

「・・・イクスさん、僕と契約して下さい！」

「こんな時に何言ってるのよ！」

当然のごとお怒りになるイクスさん。僕は無理矢理背中に背負っていたイクスさんを体の前に持ってきて契約をした。別に紙でよかったけど紙はいまないのである。

「んんっ！何すんの！」

「早く魔法を使ってください！今なら出来るはずですよ！」

きょんとするイクスさんに更に言った。

「早くしないと僕は潰される前に貴女を襲いますよ！」

効果絶大、慌てたイクスさんは杖を取り出し呪文を唱える。

「水を集め、束ねる海の王よ！私の前にひれ伏しその力を使用せよ！」

本日洪水二回目がバッファロー達を襲う。なんの形をしていたかわからなかったがバッファロー達は流されていた。

ポカンとするイクスさん。

「・・・あんな古代魔法初めてだわ。」

自分で唱えて何を言っているんだろう。

「・・・時雨君、君が契約なんてするからあんな魔法彼女が使えてしまうんだ。・・・罪は償わないといけないよ。今後は頑張りたまえ。」

剣治はそう言い残してポカンとしている魔法使いの所に歩いて行った。後は剣治達の問題だから僕は静かにゴールに向けて走り出した。

途中、罠に引っ掛かっている瀬里奈さんを助け、そして様々な罠を発動させながらゴールまでやってきた。だが・・・。

「負けませんことよ！」

すんげえ勢いでイクスさんが走ってきた。

「・・・もうきよったかマカロニめ！だが甘いわっ！」

瀬里奈さんは僕に放り投げるように言った。頷いた僕は瀬里奈さ

んを投げる。ゴールではなくイクスさんのほうに……。

「……ガン ムちゃん、後は頼んだよ！」

そういつて瀬里奈さんはイクスさんに突撃。

「スレッツ ーさーん！」

剣治は何か叫びながらその光景を見ている

イクスさんに瀬里奈さんはぶちあたり、二人は気絶。僕はゴールに向けて歩き出した。

瀬里奈さんには悪いが僕は二人共連れていった。

『ゴール！今時雨選手が気絶した二人の選手を連れてゴールしました！しかしイクス・リベナ・マカロニ選手は気絶している為勝ったのは瀬里奈選手です！これにて解散します。』

終わった……何と無く長かった今回。僕は気絶している二人を抱えてマンションに帰ろうとした。

「……時雨君、後一回で大会は終わる。せいぜいがんばってくれたまえ。」

そんな剣治の言葉を聞きながら僕は巨大迷路を後にするのであった。

マンションに帰ると管理人さんとシスウェルさん、メイさんが歓迎してくれた。

姿がないシャドさんは誰かにロープでグルグル巻にされて僕の部屋で寝ていた。

「・・・シヤドさん、大丈夫ですか？」

「んあ？時雨殿。」

僕を追い掛けていたら誰かにやられたそうだ。（犯人は間違いなく剣治だろう。）僕はシヤドさんにどいてもらいイクスさんを寝かせた。時折、寝言をいうから大丈夫だろう。

「・・・やらせはせん、やらせはせんぞ・・・うーん。」

瀬里奈さんとイクスさんはおいというてシヤドさんメイさんと一緒にテレビを見ることにした。

「・・・いやー次で優勝決まりますね？」

「そうですね、次回はとうとうプリンセスが決まります！」

いつものアナウンサーとゲストは・・・剣治？

「剣治さんは今日、巨大迷路の中まで行ってましたが大丈夫でした？」

「はい、大丈夫でした。僕の友人が頑張ってくれたから僕は嬉しいですね。」

しかし、なんで剣治は迷路にいたんだろう？

「今回は優勝候補の二人目ベリル選手と新人の瀬里奈選手ですね。」
「ベリル選手は美しいと評判ですが、僕には必要ありませんね。」

多分、剣治には家にあるフィギュアがあれば何もいらないうら

うな。

だが、剣治は途端顔を曇らせていった。

「・・・次のお題は実力でしよう？魔界が吹き飛ばなければいいですが。」

・・・そんなにベリルさんという人は強いのか？

「確かにベリルさんは神様ですからね。」

ここでゴツドがでてきたか・・・。

「大会に出ている人達の中で一番美しく強いそうです。ファンクラブまで出来たそうです。」

す、すげえ。

「・・・時雨殿、必ず勝ってください！」

「そうです！偉ぶっている神様なんかいてこまして下さい！」

「う、うん努力はするよ。」

二人の応援され（二人のほうかなりやる気が出ている。）僕は頑張る事を誓いました。

神様はいるのだろうか？そして僕が（瀬里奈さん）が優勝すれば人間界に僕は帰れるのだろうか？

「ま、今度の相手は神様だ。・・・気を引き締めないと消されるかもしれない。悪いが始めから本気でいこうか？」

天使が真面目に言っているんだから間違いないだろうな。・・・

しかし、どんな顔しているんだろう。
僕は紙に書いて二人に見せた。

「・・・時雨殿は絵がうまいな。」

「確かにうまいですね。だけど・・・相手は女性ですよ?」

僕が書いた絵はお爺さんの神様であつた。その後、三人で絵を沢山かきまくりファックス（シャドさんがどこからかもってきた。）であるところに送った。

「あ、今ファックスが送られてきました!」

「誰からですか?」

「ペンネーム、ジアメさんから神様へのお便りです。・・・似顔絵まで書いてくれてますね。」

「・・・確かに書いてくれますがこんな顔ではありませんね。・・・犯人はわかりました!」
早速ばれてしまった。

「時雨様、大丈夫ですよ。別に悪い事はしてません。」

「そうだ、時雨殿は何もしてないからな。」

「犯人は誰ですか?」

「・・・明日、優勝者が決まったらいいですよ。」
そして最後に剣治はぼそりところいった。

『・・・ジアメ君、負けたら帰れないからな。』

やはり明日は本気でやらないと僕に未来はないのかもしれないな。

今夜は僕が料理をすることにした。（まだ、包丁とフライパンしか扱えないし基本を教えてもらったただけだ。）

結果、食卓から声がしなくなった。

「・・・まあ、時雨殿、そのなんだ食べれないことはないな。」

「そうですね。頑張れば食べれますよ。」

それは慰めだろうか？この二人はまだよかった。先程起きてきた二人は酷い事を言う。

「・・・時雨君、何これ？悪いけどへたつぴだわ。」

「・・・全く、こんなまずいものは初めて食べました。棄てていいでしょうか？時雨さん。」

「あははあ、ご自由にどうぞ！」

シヨックだ。かなりシヨックだ！だが、仕方ないのである。こうしないといけない理由があるのだ。

ピンポーン！

メイさんが席を立つが僕のほうがい。

「ちよつと友達が来たみたいだから僕は外にでてくるね？」

僕は振り返らずに外に出た。外にはやはり剣治が立っていた。

「……ご苦労だね、わざとみんなに嫌われる真似をしてるのかい？明日で君はいなくなるから……。だが、もし君が負ければ帰れないんだよ？」

凶星だ。剣治に隠し事は出来ない。僕が黙っていると剣治は更に続けた。

「優勝候補のベリルはかなり強い。間違いなく瀬里奈姉さんは足手まといになる。」

何を言っているんだ？

「……明日の優勝決定戦でのお題は何だと思っ？」
うーん、またろくでもない方法だろうな。

「……ポケ ンバトルかな？」

「……ハズレ、答えは実力行使の椅子取り大会。」
なんだろうそれ？

「ルールは簡単、相手を先頭不能にした後に椅子に座れば勝ち。」

「ということは相手を必ず倒さないといけないのか。」
なんとも厳しいルールだ。

「……ちなみに発案したのは僕だ。」

なんとも酷い友人だ。

「まあ、明日は頑張るよ。」

剣治は歩いて夜の街に消えていった。

「・・・時雨。」

「・・・なあに？」

「近頃面白い事やってないな。コメディーじゃないぞ。」

「・・・そうだね。」

部屋の中ではお酒を飲んでいる人達が沢山いた。・・・いや、全員だ。なぜか管理人さん、シスウェルさんまでお酒を飲んでいる。

「・・・時雨君、あんなまずい飯つまみにもならなかったぞ！」

瀬里奈さんが小さいまんま僕に野次をとばす。

『そうだそうだ！』

周りの人達も同意する。

「ドッグフードの味がしたぞ！」

・・・鋭い。まさかばれるとは思わなかった。瀬里奈さんはドッグフードを食べたことがあるのかな？

「ついでにキャットフードの味までしゃがったぞー！」

ば、ばれた！

『そつだ！猫の味がしたぞ！』

なんか勘違いしてるような気がするがやばい！（中身を知っている僕は料理を食べる事が出来なかった。）あと、入れたものは・・・。

「時雨殿、林檎のしんをいれたら駄目だぞ！」

やはりシャドさんにはばれたか。

「あはは、じゃあ僕は寝るね？みんなお休み。」
しかし誰かに裾を掴まれた。

「・・・時雨さん、いきなり契約とか言いながら本当は私とキスしたかっただけじゃありません？」

酒瓶を片手にもちイクスさんが聞いてくる。

「い、いえ滅相もない！あれは時間がなかっただけです！」

まだ他の人がドンチャン騒いでいるのでみんなには気付かれていない。

「・・・ふーん、そうですかあ。あれは仕方なくですかあ？じゃあ・・・今度は私からしてあげましょう！」

ブンブン首をふり否定する僕。

「い、いえ、結構ですイクス様！僕は貴女からそんな事をされる程

僕は何もしてません！」

妖しく笑うイクスさん。

「ふふふ。私は嬉しかったんですよ？まだ助けてもらったお礼をしてあげません！」

「いえ、結構ですよ！そうです、僕はただたんに剣治と……つてうわっ！」

押し倒された！やばい動けない！まるで蜘蛛に捕まった虫みたいだ！

「ふふふ、ありがたく思いなさい？」

「うわああ！んー！」

情けない事に僕は気を失った。最後に天使の声が聞こえたのは覚えてる。

「……やれやれ、お前は本当にへたれだな。」

余計なお世話といたかった。

そして朝。起きたらみんな寝ていた。グッスリと眠っている。多分昼過ぎまでは起きないだろう。だが、瀬里奈さんは連れていかないといけない。僕はまだ寝ている瀬里奈さんを背負い、最後に手紙を書いた。

『今までありがとう。またいつか戻ってくるかもしれません。』

時雨』

「うーん、頭いたい。」

大会本部の前で瀬里奈さんは起きたがかなり苦しそうだ。二日酔いかな？

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。」

声は今にも死にそうである。しかし大会本部の人達は瀬里奈さんに見学を言い渡した。つまり、神様と一人で戦わないといけないという事である。

『さあ、選手入場です！まずは神様、ベリル選手です！』

観客席は凄まじい歓声である。（特に男達からの歓声が多い。）出てきたベリルさんは確かに美しかったが、僕は興味はなかった。

『次に瀬里奈選手ですが二日酔いの為、出てません。』

途端ブーイングが鳴り響く。

『そして常にビックリな行動をする時雨選手！』

歓声はベリルさんに負けてしまうが僕には嬉しかった。（どこかのおじさんが愛してるぜ！と言ってくれたのでぞつとした。）

僕がベリルさんの前に立つとベリルさんは喋りだした。

「ふーん、弱そうな顔してるわね？」

「うーん、昨日へたれって言われました。」

まあ、仕方がない発言である。

「今まで勝てたのも偶然ね？」

「はあ、確かにそうかもしれませんね。」

キツ！と睨まれた。何故に？

「この男、気にいらないわ！一発で倒してあげる！」
歓声が辺りに響き渡る。静かになったところで更に僕に聞いてきた。

「私は綺麗かしら？」

「・・・確かに綺麗ですね。」

再度歓声になり響き、ベリルさんは満足そうな顔だ。

「どう？私を好きになった？」

「いえ、綺麗だけど嫌いだと思います。」

僕は即答した。辺りに静寂がおとずれたが、笑い声が響き渡った。

「がはは！よくいったぞ！」

さっきのおじさんである。ベリルさんの顔は怒りに歪んでいる。

「・・・すぐに消してあげるわ。」

日頃のストレスか僕は自分を見失っていた。（牛乳を飲んだらなおるだろうか？）

「……出来るならやってください。」

そして始まりのアナウンスが流れる。

『それではっ！始めっ！』

『我は、怒りに自分を忘れし天使。』

さっさと天使化して相手のふところに入り一撃を繰り出す。……
・ハリセンで。

すばあああん！

上空にベリルさんが吹っ飛ぶ。

「よくもやったわね！」

剣を取り出し僕に向ける。上からの攻撃をハリセンでたたき落とす。

すばん！

剣に衝撃を送り込み一瞬だがベリルさんの動きが止まる。見逃す程今日の僕は甘くない。

すばあああん！

もう一度ベリルさんがちゅうを舞う。僕も吹き飛んだベリルを追い掛け空に飛ぶ。そして地面にハリセンでたたき落とす。これを喰らったら流石の神様でも昇天である。

渾身の一撃を繰り出し、ベリルさんに振り下ろす。

「時雨やめろ！」

天使が僕を止めた。

「もういいだろう？お前の勝ちだ。」

地上に落ちていくベリルさんを助け、僕も地上におりた。

グサア！

剣が僕を貫いた。たまたま落ちてきた所に僕がいたからである。しかし、僕が避けたらベリルさんに当たっていた。だが心配しないで欲しい刺さった所は僕の羽である。

「・・・うんが良かったな。」

「まあ、たしかに。」

僕はそのまま椅子に座った。これで全てが終わった。歓声が聞こえる。

「いいぞ兄ちゃん！俺と結婚しようぜ？」

僕は大声で叫んだ。

「遠慮します！」

そのなな 優勝したのは男？（後書き）

えー実は次で終わりです！ごめんなさい！優勝したのは時雨君みたいですがきちんと瀬里奈さんになっています。さて、いろいろ大変ですが最後に見てくれてありがとうございます。次回はエピソードです！短くなると思います。

そのはち プリンセス編しゅーりょー（前書き）

今回で魔界から時雨君がいなくなります。

そのはち プリンセス編しゅーりょー

辺りはお祭り騒ぎである。

ドンチャンいつている。僕は一人で大会本部から出ようとしたが誰かに腕を掴まれた。ハデスである。

「おにーちゃんどこ行くの？」

「帰るんだよ。人間界に。」

途端泣きそうな顔になるハデス。

「やだやだやだっ！おにーちゃんと一緒にいいなり！」

いいなり？僕はハデスをじっと見つめた。

……このハデスは偽者だ。ハデス？から離れる。

「あなたは誰ですか！」

ハデス？は笑いだした。

「ふふふっ。ばれちゃしかたないわね！」

ハデス？はハデスではなくなった。

「時雨く〜ん！会いたかったよ〜〜〜！」

飛び込んできたのはアスルさんである！

「うわあ！ああああアスルさんがなんでここにいるんですか！」

僕にアスルさんが抱き着く前にアスルさんが僕から離れる。

バキュン！

僕の足元に弾丸がのめり込む。

「・・・キシス！危ないでしょう？」
なんと撃ったのはキシスであった。

「たまたま銃が暴発しただけだきにするな。・・・久しぶりだな時雨。」

相変わらず軍人口調である。

「うん、キシス久しぶりだね？元気だった？」

この二人とはマオウを倒す時組んだメンバーである。

「まあ、一応元気だったぞ！」

しかしなぜこの二人が？

「私達はお父さんに頼まれて大会で仕事してたの。」
頷くキシス。

「私はアナウンサー役でアスルはハデスの役をしていた。」

「うーん、わからなかったなあ。」

ハデスがおかしいのは初めからわかっていた。あんなに元気なハデスは初めてだ。

「実はね時雨君、今回貴方を選んだのは剣治君なんだ。」

今明かされる真実。

「実際は魔王さんとじゃんけんで決めたそうだ。魔王さんが勝ったら自分が出て、剣治が勝ったら時雨が出ると決めてたんだ。」

「そしたら剣治君が勝ったの！だから時雨君が選ばれたんだ。」

つまり、僕の魔界行きはじゃんけんで決まったのか。だけど終わったから帰っていいんだろう。

「キシス、人間界に帰っていいのかな？」

キシスは僕のところへ近付き頷いた。

「ああ、大丈夫だ。」

キシスはアスルさんの後ろを指差しながらアスルさんにこういった。

「あ、魔王さんがアスルを呼んでるぞ？」

アスルさんは走って行った。

キスは僕に向き直ったが顔が赤い。

「どうしたのキス？病気なの？」

頷くキス。

「ああ、病気だ。」

「病名は？」

「凄く病気なんだろうな。」

「・・・恋の・・・病。」

「・・・ちなみに誰からどうやってうつされた？」

「誰かさんがお別れの挨拶をした時。そしてこれはあの時のお礼だ！受け取れっ！」

狙撃銃を構えたので目を閉じてしまった。

唇に何か当たった気がする。目を開けるとキスの顔が目の前にあった。

キスは顔を離しそっぽをむいた。

「・・・お礼だ。」

「あ、うん。ありがとう。」

キスは笑ってくれた。

「すいません、お邪魔虫です。」

現れたのは剣治だった。・・・覚えている方は凄いです。

「剣治、どうしたの？昔のネタ使って。」

剣治はどこでも アを出してから僕にいった。

「君に話したい女の子が来ているぞ？」

剣治の後ろにはベリルさんがたっていた。

僕を指差し高らかに宣言した。

「・・・貴方は私に対して手加減しましたね？いいでしょう宣戦布告として受け取ります。・・・なめられたものです。最後にお聞きしたいのですが何故貴方は私に手加減したんですか？」

答えに困っていると剣治と天使が僕に智恵を貸してくれた。（後でかなり厄介な事になった。・・・悪魔である。）

「えーっとそれは貴女が女の子だからです。それに真っ直ぐな性格だから手加減しました。」

天使と剣治から言われた事をそのまま伝える。

何故か顔を真っ赤にしてベリルさんは僕にむかっていった。

「あ、ありがたき思いなさい！貴方を私の・・・婿候補にしてあげるわ！」

走りさっていった。キスは僕を睨み付けている。

「お前はもうちょっと人を疑え！ああいうのは自分で考えて言うものだ！」

「た、確かに。」

剣治を睨み付けようとしたらすでにドアを潜っていた。

「時雨君、早くこないとけしちゃうよ?」

僕はキスに挨拶した。(普通に)

「じゃあね、また今度くるよ。」

「ああ、約束だ。指切りをしよう。」

「はは、わかったよ。」

やっぱり子どもだなあと思ったらキスは大胆であった。僕に抱き着いたのだ。

「時雨、私をガキ扱いするなよ?」

見透かされていた。

「あ、うんわかった。」

僕を抱きしめキスは離れた。すると今度はアスルさんが走ってきた。

「ストップ!時雨君ちよつとまった!」

ぜーぜー言いながら僕に手紙を渡した。

「あ、後で見てね?お父さんからだから。」

そして僕にキスしようとしたがキシスが僕に蹴りをいれドアに押し込んだ。

「ちよつと、キシスなにをするの？感動の別れじゃない。」

「感動は一度でいいんだよ。今回は私の勝ちだな。」

こうして、僕は魔界からいなくなった。瀬里奈さん達には僕の住所を書いた紙を渡してある。（酔っ払いどもの上着や目の前においた。）

そして、彼女達の後日談である。

管理人さんとシスウェルさんはマンションにいるらしい。

「今日はいいい天気ですね、シスウェルさん。」

「・・・いや、地下だから天気は関係ないでしょう。」

次に女王となった瀬里奈さんとそれを助けるイクスさん。

「時雨さん、ありがたく思いなさい。今度私が貴方と契約して使えた魔法を教えてあげるわ！」

「ちよつと何隠れて時雨君に手紙を送ろうとしてんの？私が送るからあなたは書類を片付けなさい！」

僕に宣戦布告されたと勘違いしたベリルさんは修行をしているらしい。

「・・・ふ、ふふふふ。あいつを倒して私の家来もしくは・・・ふふふ。」

僕の影だったシャドさんからは連絡がない。

「こつやって林檎を向いてるとシャドさんを思い出すなあ。」

「時雨殿、林檎を持って行って構わないか？」

「……！？」

メイドだったメイさんは剣治の家にいた。

「お久しぶりです。時雨様！今度貴方の家に行っていていいですか？」

「はい、別にいいですよ。」

「……時雨君、家のメイドを誘惑しないでくれたまえ。」

最後に会ったキスとアスルさんは魔王さんから色々な仕事をもらい働いているらしい。

「あー！時雨君の写真！いつ撮ったの？」

「秘密だ。アスルに教えたっていい事ないからな。」

「ちようだい？」

「……却下だ。」

そして、魔王さんからの手紙の事を少し僕は忘れたままだった。

そのはち プリンセス編しゅーりょー（後書き）

プリンセス編終わりました。懐かしい？人達も出ましたがどうだったでしょうか？みなさん忘れているかもしれませんがハデスは真面目に学校にいつてます。さて、御意見御感想は評価と言う名のBoxにしてくれると嬉しいです。（なーにいつてんだか。）次回は帰ってきた時雨君ですが、今までいた人がいなくなったり、新たな変人や事件に巻き込まれたらいいなと思います。まあ、どうかこれからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8355a/>

アンノウン・プリンセス

2010年10月28日08時55分発行